

総 説

南西諸島におけるニホンイタチ *Mustela itatsi* の移入—歴史、現在の生息状況 および在来陸生動物への影響

中 村 泰 之^{1,2)*}

Introduction of the Japanese weasel *Mustela itatsi* to the Nansei Islands:
History, present occurrence, and impacts on indigenous terrestrial faunas

Yasuyuki NAKAMURA^{1,2)*}

要 旨

南西諸島におけるニホンイタチの移入史と移入集団の現状、そして在来の陸生動物への潜在的な影響についての文献情報をまとめた。ニホンイタチの移入は1930年代後半(吐噶喇列島)から1977年(沖縄諸島の阿嘉島)まで、39ないし40島で実施された。その目的はおもに農業被害をもたらすネズミ類への対策であり、奄美群島の一部では咬症被害をもたらす毒ヘビのハブ対策であった。ニホンイタチは21島(上三島の黒島、吐噶喇列島の臥蛇島など5島、奄美群島の喜界島など3島、沖縄諸島の座間味島など4島、宮古諸島の宮古島など5島、八重山諸島の波照間島、大東諸島の北大東島と南大東島)で今も生息しており、さらに2島でかつて定着していた情報がある。移入されたニホンイタチが捕食を通じて各種の在来陸生動物の個体数減少や分布の局所化、あるいは個体群の消滅に関与したことが示唆されている。

キーワード：移入、外来種、捕食者、保全

(2024年8月25日受付、2025年9月30日受理、2026年1月31日発行)

はじめに

南西諸島(琉球列島と大東・尖閣諸島)は、九州と台湾との間に点在する島々から構成される(図1)。この島嶼域における陸生脊椎動物相の特徴のひとつは、非飛翔性の哺乳類の種多様性が乏しく、トガリネズミ(食虫)目やネズミ(齧歯)目しか生息しない島が多いことである(伊澤, 2015)。たとえば陸生のネコ(食肉)目が自然分布するのは、ニホンイタチ *Mustela itatsi* Temminck, 1844 の生息する屋久島と種子島(大隅諸島)、そしてイリオモテヤマネコ *Prionailurus bengalensis iriomotensis* (Imazumi, 1967)の生息する西表島(八重山諸島)に限られる。ただし、宮古島(宮古諸島)などいくつかの島では後期更新世

ないし完新世のネコ科の化石が発見されており(長谷川, 1985; 高橋ほか, 2023),かつては陸生のネコ目が生息していたことがわかっている。

ネコ目の多くの種は、獲物を捕らえるための牙や爪、そして高い身体能力を持つ捕食者であり、陸上生態系において、栄養段階の上位を占めることが多い。ネコ目のいない島の在来陸生動物は、多くの場合強力な捕食者のいない環境に適応しているため、こうした島にひとたび外来のネコ目が侵入すると、在来の陸生動物は捕食により大きな影響を受け、場合によっては絶滅の危機に直面する(たとえば Doherty et al., 2016)。南西諸島では、これまでにネコ *Felis catus* Linnaeus, 1758、イヌ *Canis lupus familiaris* Linnaeus, 1758、フイリマングース *Urva*

¹⁾ 琉球大学博物館(風樹館) 〒903-0129 沖縄県中頭郡西原町千原1

²⁾ 徳之島世界遺産センター 〒891-7425 鹿児島県大島郡徳之島町花徳2206

* Corresponding author. E-mail: ynaka.riukiarai@gmail.com

© 2026 兵庫県立人と自然の博物館。

オープン・アクセス。注があるものを除いて、この記事の内容物はクリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンスの下に提供されています
(<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>)。

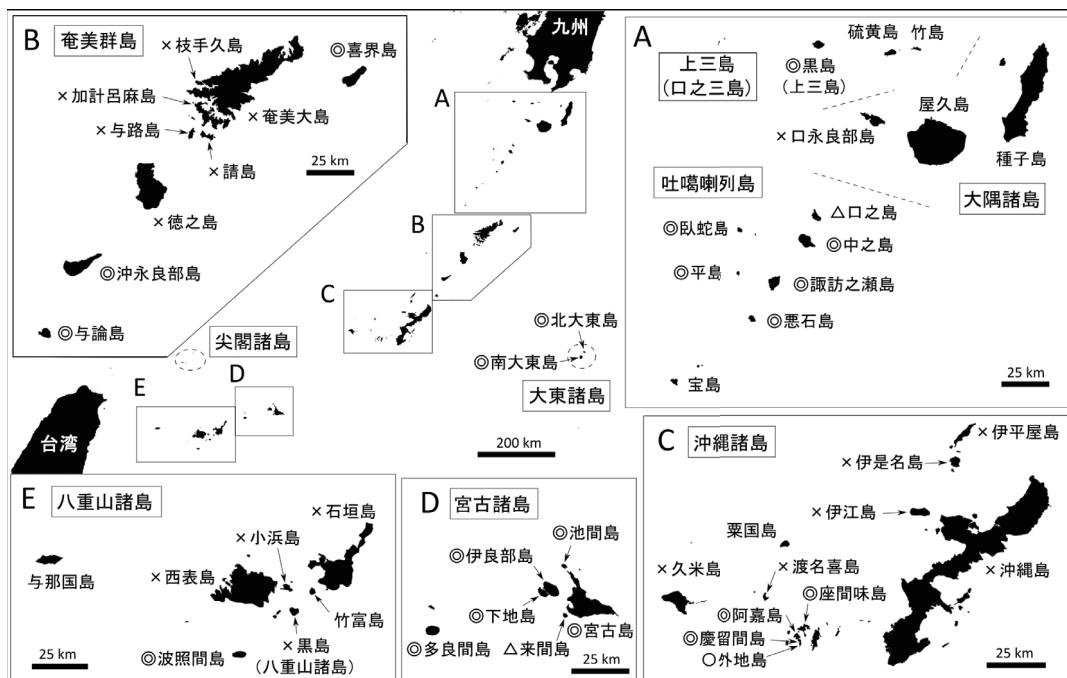


図1 本報告で扱う南西諸島の各島とその位置。島名の前のシンボルは、“◎”は移入されたイタチが生息している島，“×”はイタチが移入されたが定着しなかった島，“△”は移入されたイタチの生息状況が不明の島，“○”はイタチが生息しており、その由来が(移入なのか近隣の島から侵入したのか)不明であることを示す。

auropunctatus (Hodgson, 1836), そしてニホンイタチといったネコ目の外来種が持ち込まれ、意図的ないし非意図的に野生化している。こうしたネコ目の外来種は、すでにさまざまな在来陸生動物の個体群において、その存続に対するおもな脅威となっている(塩野崎, 2016; 橋本ほか, 2016; 亘, 2016; Maeda et al., 2019; Kobayashi et al., 2019; 亘ほか, 2021)。

南西諸島におけるネコ目の外来種のうち、ニホンイタチ(以下ではとくに特定の必要がない限りイタチと略す)は、おもに行政により、組織的に移入が行なわれてきた点で異色の存在である。本種は本州・四国・九州とその周辺離島の固有種で(Masuda and Watanabe, 2015; 鈴木, 2018), ネズミ類を捕食することから、おもにネズミ類による農林業被害への対策として、日本領であった時期のサハリン南部を含む国内各地、とくに島嶼に移入されてきた(白石, 1982; 鈴木, 2018)。移入されたイタチは、捕食を通じて在来陸生動物の生息状況に負の影響を与えてきたと考えられている(樋口, 2002; 太田ほか, 2015; 長谷川, 2017)。在来生態系への影響に対する懸念から、環境省は“伊豆諸島などのニホンイタチ”を緊急対策外来種に指定した(環境省, 2014), 同様に、鹿児島県は県内のニホンイタチの移入個体群を緊急防除種とし(鹿児島県, 2017), 沖縄県は県内のニホンイタチを防除対策外来種の重点対策種とした(沖縄県, 2018a)。そして沖縄県は宮古諸島において、下地島と伊良部島でイタチを捕獲するなどの対策を講じ始めている(沖縄県, 2020, 2022)。

一方で、南西諸島におけるイタチの移入史や現在の生息状況については、詳しく知られていない(白石, 1982; 鈴木, 2018; 山田, 2021)。そしてイタチの移入により在来の陸生動物が受

けた影響については、さまざまな文献(たとえば, Hikida et al., 1992; 関, 2001a, b)で示唆されているものの、それを概観できる資料は無い。そこで本稿では、こうしたイタチの移入史と現在の生息状況、そして在来種が受けた影響などについての情報を整理した。本稿で整理した基礎的な情報は、定着したイタチがこの地域の陸上生態系へ及ぼしてきた、あるいは今後及ぼしうる影響について、適切な評価とそれに応じた対策が講じられることを後押しできる。また、移入の効果についての情報を整理しておくことによって、今後どこかでイタチの移入が、過大な期待をもとに企図されることを抑制する一助ともなるはずである。

材料と方法

本稿では、南西諸島におけるイタチの移入史と現在の生息状況、そして在来種への影響等に関する文献情報を整理した。個々の移入の年代や移入個体数は文献により異同があり、その正誤の判断が難しいため、本稿ではそれをそのまま採用した。ただし、明らかな引用による情報は、重複を避けるために除いた。

各島に現在もイタチが生息するかどうかは、便宜的に過去20年(2005~2024年:記述から確認時期を推定したケースを含む)の間に生体ないし死体、あるいはフィールドサインが確認されており、その後の調査で生息に否定的な情報がないことをもとに判断した。具体的な確認手法は不明でも、当該の島における生息を確認したと言明している事例(岩尾, 2015)も含めた。近年の生息情報が無い吐噶喇列島の平島と諫訪之瀬島、そ

して奄美群島の与論島については、現地で徒歩あるいは車両による目視探索と、フィールドサインの有無の調査を行った。

ニホンイタチの地域集団は、基亜種のホンドイタチ *Mustela itatsi itatsi* Temminck, 1844 や、屋久島と種子島の亜種コイタチ *Mustela itatsi sho* Kuroda, 1924 などと区別されることがある。しかし本種の亜種区分は、近年の文献では採用されないことが多い(鈴木, 2018)。本稿でもそれに従つた。また、本州中部から九州にかけて外来種のシベリアイタチ(チョウセンイタチ) *Mustela sibirica* Pallas, 1773 が定着しており、稻留(2014)は、南西諸島に移入された“イタチ”にシベリアイタチが含まれたかどうかが確認されていないと指摘する。それでも、現時点では南西諸島に移入されたイタチに、ニホンイタチ以外のイタチ類が含まれたという情報は無いため、本稿ではこの地域に移入された“イタチ”をニホンイタチとして扱つた。なお、山田(1998)は表中で沖縄県をシベリアイタチの分布地として挙げているが、その根拠となつた情報を突き止めることはできなかつた。

イタチが移入された島と現在の生息状況等

南西諸島においてイタチが移入されたのは、文献に見える限り39島であり、もし外地島のイタチ(移入の記録は無い)が移入由来だとすれば40島となる(表1)。このうち、黒島(八重山諸島)については住民1名の証言しかないものの、移入が行われた可能性の排除は難しいとみなした。その他、白石(1982)はイタチが移入された島として竹富島を挙げているが、同島でイタチが移入されたことを示す情報は無い(表1)。白石(1982)が示した移入数と移入年から見て、これは伊波(1966b)の西表島への移入の記録を示す表のタイトルである“竹富町”が、誤植で“竹富島”と書かれていたことに由来するとみられる。

イタチが移入された(ないしその可能性のある)40島のうち、現在もイタチが生息すると判断したのは21島(上三島の黒島、

吐噶喇列島の臥蛇島・中之島・平島・諏訪之瀬島・悪石島、奄美群島の喜界島・沖永良部島・与論島、沖縄諸島の座間味島・阿嘉島・慶留間島・外地島、宮古諸島の宮古島・池間島・伊良部島・下地島・多良間島、八重山諸島の波照間島、そして大東諸島の北大東島と南大東島)である(表1;図1)。このうち平島(調査期間は2024年6月8~9日)・諏訪之瀬島(同9~11日)・与論島(同5月20~22日)では、調査の際にイタチの目視確認(与論島)、ないしフィールドサインの発見(平島・諏訪之瀬島)があつた(図2)。イタチが移入されたが、現在の生息が確認できなかつた19島のうち、吐噶喇列島の口之島では、2000年代前半までイタチの目撃例や頭骨の発見例、糞の観察例がある(表1)。ところが近年この島で調査を行つた稻留ほか(2014)や中園ほか(2020)は、イタチの生息を確認できず、島からイタチが消滅した可能性に言及している。なお、この島では、同じイタチ科のニホンテン *Martes melampus* (Wagner, 1840)が移入されて定着している(稻留ほか, 2014; 中園ほか, 2020)。また、宮古諸島の来間島では、過去にイタチが定着していたと住民が証言しているものの、近年はその生息が確認されていない(表1)。

その他の17島では、放されたイタチは定着しなかつたと考えられる。そのうち渡名喜島と小浜島においては、イタチの移入から生息が確認できなくなるまでに要した期間は数年程度だつたという住民の証言がある(当山, 1981a; 田中, 2004; 島村, 2013)。そして久米島では、1965~70年に1,000匹超が移入されたイタチは、1973年に目撃され(池原, 1974a), 1978~79年の調査では確認されていない(池原, 1981)ことから、その間に消滅したと考えられる。イタチの定着の成否に関わる要因については何もわかっていない。奄美群島や沖縄では、捕食者なし餌を巡る競合者となりうるハブ *Probothrops flavoviridis* (Hallowell, 1861)がいる島では、イタチが定着できなかつたとする見方がある(Hayashi and Suzuki, 1977; 林, 1979; 諸喜田, 1984; 阿部ほか, 1991; 山田, 2000; 服部, 2000)。



図2 調査で確認されたイタチのフィールドサイン。諏訪之瀬島で見られた足跡(左)と、平島で見られた糞(右)。白の破線は糞の輪郭を示す。スケールは1円硬貨(直径20 mm)。

表1 南西諸島の各島におけるイタチの移入および生息状況に関する記録、*は年年度であること、†は本研究でその島における現在の生息について、抛り所とした情報であることを示す。

番号	島名	生息状況	推定定着時期	移入に関する情報		イタチの原産地	生息と消滅に関する情報	消滅についての言及	
				移入時期・移入数・文献	移入に関する情報				
1	大隅諸島 Osumi Islands 口永良部島 Kuchi noerabu Jima	○	不明 (森田, 1984)						
2	上三島 (口之島・三島) Kaminoshima Islands (Kuchi inoni shima Islands)	○	1956 (1) 1950~61その前後 [5, 6 匹] (宮本ほか, 1960) (2) 戰前 [數匹], 1956 [40 匹] (森田, 1988a)	(i) 屋久島 (宮本ほか, 1960) (ii) 戰前は中之島から之島。 1956年には「大隅」 (森田, 1988a)	直接記載: 小溝・小溝・小溝 (2012) † フィールドサイン: 森田 (1988c, 1995) (註); 腹部 (2000) フィールドサイン: 森田 (1988c) (註); 稲留ほか (2014) : 中国ほか (2020) (註)				
3	吐噶喇列島 Tokara Islands 口之島 Kuchinoshima	?	不明 (森田, 1988b, 1995) (2) 戰後 (腹部, 2000)						
4	風蛇島 Gajima	○	1948? (1) 「1959年の数年前」 (谷川, 1959, p. 197) (2) 1943, 1948 (註) [3匹] (伊波, 1971b) (3) 不明 (Ota et al., 1994)	(i) 平島 (谷川, 1959; 宮本ほか, 1960) (ii) 中之島 (Ota et al., 1976) (iii) 中之島 (Ota et al., 1994) † 不明 (伊波, 1971b) 不明 (中之島, Ota et al., 1994) † 不明 (屋久島県, 2017)	直接記載: Ota et al. (1994); 関 (2012) †; 稲留ほか (2014) † フィールドサイン: Ota et al. (1994) †; 伊波, 1971b 不明 (三友, 1954); 米田 (2008); 屋久島県 (2017)				
5	中之島 Nakanojima	○	不明 (森田, 1995) (2) 1930 [數匹がい] (尾, 2001b)	平島 (腹部, 1976; 森田, 1995) 平島 (腹部, 1976; 森田, 1995)	直接記載: Ota et al. (1994); 森田 (1995); 関 (1995); 伊波, 1971b 不明 (尾, 2001b)				
6	平島 Tairajima	○	1930年代 後半 (Ota et al., 1994)	(i) 「沖エラブ島」 (下野, 1994, p. 296) (ii) 「冲エラブ島」 (下野, 1994) (iii) 「屋久島・種子島」 (森田, 1985) (註)	直接記載: Ota et al. (1994); 本研究 (註) † 不明 (尾, 2001b)				
7	瀬戸之瀬島 Suwasejima	○	不明 (森田, 1995)	平島 (森田, 1995)	直接記載: Ota et al. (1994); 本研究 (註) † 不明 (尾, 2001b)				
8	瀬石島 Aku seki Jima	○	不明 (森田, 1995)	(i) 「川辺」 (= 大隅半島) (下野, 1994) (ii) 「川辺」 (伊波, 1964)	直接記載: Ota et al. (1994); 本研究 (註) † 不明 (尾, 2001b)				
9	奄美群島 Amami Islands 喜界島 Kikaijima	○	1942~43 (1) 1942 四元; (2) 1942~45 [13 匹]; (3) 1942~45 [40 匹] (註) (森田, 1964) (4) 1942~43 [13 匹] (伊波, 1966b) (5) 1942~43 [13 匹] (林田, 1968)	(i) 奄美島 (1942 年) (ii) 「加世田の周辺」 (伊波, 1964) (iii) 「大島・鹿児島県・薩摩郡・薩摩町」 (伊波, 1966b) (iv) 「大島・鹿児島県・薩摩郡・薩摩町」 (伊波, 1966b) (v) 「大島・鹿児島県・薩摩郡・薩摩町」 (伊波, 1966b)	直接記載: 鈴島 (1995); 葵島 (2000); 当山 (2010); 坂上ほか (2011) † 不明 (尾, 2001b)				
10	奄美大島 Amami oshima	○	1943 (1) 1943 数匹 (1943 年) (2) 1943~57* [1105匹] (四元, 1959) (3) 1953 増約100匹; (4) 1956~59 [1500匹] (伊波, 1966b) (5) 1954~58 [381匹] (Hayashi and Suzuki, 1977; 林, 1979) (5) 1954~58 [1565匹] (白石, 1982)	(i) 奄美島 (1943 年) (ii) 「大島・鹿児島県・薩摩郡・薩摩町」 (伊波, 1966b) (iii) 「大島・鹿児島県・薩摩郡・薩摩町」 (伊波, 1966b) (iv) 「大島・鹿児島県・薩摩郡・薩摩町」 (伊波, 1966b) (v) 「大島・鹿児島県・薩摩郡・薩摩町」 (伊波, 1966b)	直接記載: 鈴島 (1995); 葵島 (2000); 米田 (2008); 屋久島県 (2017)				
11	大隅諸島 Eatakejima	○	1954* [175匹] (四元, 1959) (2) 1954, 57 [207匹] (伊波, 1966b) (3) 1954, 57 [115匹] (伊波, 1969) (4) 1954 [115匹], 1957 [32 匹] (Hayashi and Suzuki, 1977; 林, 1979)	(i) 「大島郡喜界町・鷲崎町・大隅町」 (伊波, 1966b) (ii) 「大島郡喜界町・鷲崎町・大隅町」 (伊波, 1966b) (iii) 「大島郡喜界町・鷲崎町・大隅町」 (伊波, 1966b)	直接記載: 鈴島 (1995); 葵島 (2000); 木場 (1962) (註) 証言・伝聞: 版部 (2000) (註)				
12	加計呂麻島 Kakeromajima	○	1955 [180匹], 1956 [200匹] (林, 1992) 1957 [58] (林, 1979)	(i) 不明 (森田, 1964) (ii) 「大島郡喜界町・鷲崎町・大隅町」 (伊波, 1966b) (iii) 「大島郡喜界町・鷲崎町・大隅町」 (伊波, 1966b)	直接記載: 鈴島 (1995); 葵島 (2000); 木場 (1962) (註) 証言・伝聞: 版部 (2000) (註)				
13	諸島 Ukejima	○	1957 [58] (199匹) (Hayashi and Suzuki, 1977; 林, 1979)	(i) 不明 (森田, 1964) (ii) 「大島郡喜界町・鷲崎町・大隅町」 (伊波, 1966b) (iii) 「大島郡喜界町・鷲崎町・大隅町」 (伊波, 1966b)	直接記載: 鈴島 (1995); 葵島 (2000); 木場 (1962) (註) 証言・伝聞: 版部 (2000) (註)				
14	与路島 Yorijima	○	1957 [56] (森田, 1975)	(i) 不明 (森田, 1964) (ii) 「大隅半島」 (伊波, 1966b)	直接記載: 鈴島 (1995); 葵島 (2000); 木場 (1962) (註) 証言・伝聞: 版部 (2000) (註)				

表1のつづき

番号	鳥名	生息状況	推定期	移入に関する情報		生息と消滅に関する情報
				移入時期・「移入数」・文献	イタチの原産地	
15	徳之島 Tokunoshima	未記載	1954~57* [565匹] (森田, 1964; 1976; 白石, 1982)	① 「大島郡喜界町・離島部大隅町・未吉町・薩摩郡喜之郷町・姶良郡福山町・姶良町等」(四元, 1969, D. 156)	(i) Hiyashi and Suzuki (1971) は、イタチの生息島嶼としているが、(ii) 「奄美大島と徳之島では、移入開始から25年を経た現在、イタチをみかけたという住民の報告は全くない」(森田, 1979, p. 617) では、「痕跡すらみかけたことがない」(林, 1979, p. 617) が、(iii) 「確認できなかつた」(林, 1979, p. 617) 住民の話では最近はイタチを見かけないとのことである。(板島, 1985b, p. 36)	消滅についての言及
16	沖永良部島 Okinotorishima	◎	1950年代	① 1952 (四元, 1959) ② 1954~58 [若干] (森田, 1964) ③ 1954~58 [相当數] (伊波, 1966b) ④ 1952 [相当數] (伊波, 1966b) ⑤ 1967? (伊田, 1975)	(i) 「大島郡喜界町・離島部大隅町・未吉町・薩摩郡喜之郷町・姶良町・姶良町等」(四元, 1969, D. 156) (ii) 「昭和二十八年に村の事業として喜界島から、鹿児島県衛生部を経て、九州本土から運入」(森田, 1964) (iii) 「九州 (7) と喜界島 (森田, 1964)」(森田, 1968b); 鹿島 (1991b); 本研究 (2006); 証言・伝聞: 伊波 (1966b); 不明: Hiyashi and Suzuki (1971); 米田 (2008); 鹿兒島県 (2017)	直接記録: 中村 (2006); 鹿島 (1991b); 本研究 (2006); 証言・伝聞: 伊波 (1966b); 不明: Hiyashi and Suzuki (1971); 米田 (2008); 鹿兒島県 (2017)
17	与論島 Yoronjima	◎	1950年代?	① 1956 (四元, 1959) ② 1954~58 [163匹] (森田, 1964) ③ 1954~10 (10匹), 1957 [200匹] (伊波, 1966b); 白石, 1982 ④ 1953 [13匹], 1955 [60匹] (森田, 1988b)	(i) 「九州 (7) と喜界島 (森田, 1964)」(森田, 1968b); 鹿島 (1991b); 本研究 (2006); 証言・伝聞: 伊波 (1966b); 不明: Hiyashi and Suzuki (1971); 米田 (2008); 鹿兒島県 (2017)	直接記録: 森田 (1968b); 鹿島 (1991b); 本研究 (2006); 証言・伝聞: 伊波 (1966b); 不明: Hiyashi and Suzuki (1971); 米田 (2008); 鹿兒島県 (2017)
18	沖縄諸島 Okinawa Islands 伊平屋島 Iriyajima	未記載	1950年代?	① 1967~68 [472匹] (Uchida, 1969); 内田・宮良, 1972; 白石, 1982 ② 1968* [472匹] (宮良, 1972)	(i) 鹿児島県本土部と種子島 (小柳ほか, 1969) (ii) 鹿児島県と隣県 (小柳ほか, 1969)	直接記録: 森田 (1968b); 鹿島 (1991b); 本研究 (2006); 証言・伝聞: 伊波 (1966b); 不明: Hiyashi and Suzuki (1971); 米田 (2008); 鹿兒島県 (2017)
19	伊豆名島 Zenajima	未記載	1950年代?	① 1970~72* [806匹] (宮良, 1972) ② 1969~71 [806匹] (内田・宮良, 1972)	(i) 鹿児島県本土部と種子島 (小柳ほか, 1969) (ii) 鹿児島県と隣県 (小柳ほか, 1969)	直接記録: 森田 (1968b); 鹿島 (1991b); 本研究 (2006); 証言・伝聞: 伊波 (1966b); 不明: Hiyashi and Suzuki (1971); 米田 (2008); 鹿兒島県 (2017)
20	沖繩島 Okinawajima	未記載	1950年代半ば? (2, 3匹) [註記] (伊波, 1966a)	1950年代半ば? (2, 3匹) [註記] (伊波, 1966a)	与論の真を参照	「数年でイタチはみられなくなつたらしい」(当山, 1981a, p. 55)
21	伊江島 Iejima	未記載	1950年代?	① 1966 [151匹] (伊波, 1966b) ② 1966~67* [360匹] (宮良, 1969) ③ 1966~67* [360匹] (Uchida, 1969) ④ 1966~67* [360匹] (宮良, 1972) ⑤ 1966~67* [1053匹] (内田・宮良, 1972)	(i) 鹿児島県本土部と種子島 (小原, 1967) (ii) 鹿児島県と隣県 (小柳ほか, 1969)	直接記録: 森田 (1968b); 鹿島 (1991b); 本研究 (2006); 証言・伝聞: 伊波 (1966b); 不明: Hiyashi and Suzuki (1971); 米田 (2008); 鹿兒島県 (2017)
22	達名島 Tonakijima	未記載	1950年代?	① 1970~71* [123匹] (宮良, 1972) ② 1970 [125匹] (当山, 1981a) ③ 1968~71 [123匹] (内田・宮良, 1972; 白石, 1982)	(i) 鹿児島県本土部と種子島 (小原, 1967) (ii) 鹿児島県と隣県 (小柳ほか, 1969) (iii) 「九州方面」(当山, 1981a, p. 55)	直接記録: 森田 (1968b); 鹿島 (1991b); 本研究 (2006); 証言・伝聞: 伊波 (1966b); 不明: Hiyashi and Suzuki (1971); 米田 (2008); 鹿兒島県 (2017)
23	久米島 Kumejima	未記載	1950年代?	① 1965 [4匹] (伊波, 1966b) ② 1965~68 [503匹] (Uchida, 1969) ③ 1965~68* [503匹] (宮良, 1972; 池原, 1974a) ④ 1967~70 [1053匹] (内田・宮良, 1972) ⑤ 1965~70 [1057匹] (白石, 1982)	(i) 1965 年は種子島 (伊波, 1966b); (ii) 鹿児島県本土部と種子島 (小原, 1967) (iii) 鹿児島県と隣県 (小柳ほか, 1969)	直接記録: 森田 (1968b); 鹿島 (1991b); 本研究 (2006); 証言・伝聞: 伊波 (1966b); 不明: Hiyashi and Suzuki (1971); 米田 (2008); 鹿兒島県 (2017)
24	座間味島 Zanamijima	◎	1957~58	① “座間味村”に 1957~58 [約 83匹] (伊波, 1966b); 宮良, 1972 ② 1957~58 [約 40匹] (Uchida, 1969) ③ 1957~59 [座間味島・阿嘉島・離留間島に 83匹] (池原, 1974b) ④ “座間味村”に 1957~58 [約 40匹] (白石, 1982)	(i) 1957~58 [座間味島・阿嘉島・離留間島に 83匹] (池原, 1974b) (ii) 1957~58 [阿嘉島・離留間島に 83匹] (池原, 1974b) (iii) 1957~59 [座間味島・阿嘉島・離留間島に 43匹] (白石, 1982)	直接記録: 池原 (1974b); フィールドガイド (1968); 開口ら (2002); 不明: 内田・宮良 (1972); 嵩原まか (1997); 米田 (2008); 内田・宮良 (2023); 鹿島 (1974a); 証言・伝聞: 球球大学農家政策部 (1966); 伊波 (1966b); 不明: Hiyashi and Suzuki (1971); 米田 (2008); 沖縄県 (2017); 本研究 (2006); 証言・伝聞: 沖縄県 (2017); 本研究 (2020)
25	阿嘉島 Akajima	◎	1977	① “座間味村”に 1957~58 [約 83匹] (伊波, 1966b); 宮良, 1972 ② 1957~58 [座間味島・阿嘉島・離留間島に 83匹] (池原, 1974b) ③ 1957~59 [座間味島・阿嘉島・離留間島に 83匹] (池原, 1974b) ④ 1957~58 [阿嘉島・離留間島に 43匹] (白石, 1982)	(i) 1957~58 [座間味島・阿嘉島・離留間島に 83匹] (池原, 1974b) (ii) 1957~58 [阿嘉島・離留間島に 43匹] (白石, 1982)	直接記録: 池原 (1974b); フィールドガイド (1968); 開口ら (2002); 不明: 内田・宮良 (1972); 嵩原まか (1997); 米田 (2008); 内田・宮良 (2023); 鹿島 (1974a); 証言・伝聞: 球球大学農家政策部 (1966); 伊波 (1966b); 不明: Hiyashi and Suzuki (1971); 米田 (2008); 沖縄県 (2017); 本研究 (2006); 証言・伝聞: 沖縄県 (2017); 本研究 (2020)
26	慶留間島 Gerumojima	◎	不明	① “座間味村”に 1957~58 [約 83匹] (伊波, 1966b); 宮良, 1972 ② 1957~58 [座間味島・阿嘉島・離留間島に 83匹] (池原, 1974b) ③ 1957~59 [座間味島・阿嘉島・離留間島に 83匹] (池原, 1974b) ④ 1957~58 [阿嘉島・離留間島に 43匹] (白石, 1982)	(i) “座間味村”に 1957~58 [約 83匹] (伊波, 1966b); 宮良, 1972 (ii) “座間味村”に 1957~58 [約 83匹] (伊波, 1966b); 宮良, 1972 (iii) “座間味村”に 1957~58 [約 83匹] (伊波, 1966b); 宮良, 1972 (iv) “座間味村”に 1957~58 [阿嘉島・離留間島に 43匹] (白石, 1982)	直接記録: 池原 (1974b); フィールドガイド (1968); 開口ら (2002); 不明: 内田・宮良 (1972); 嵩原まか (1997); 米田 (2008); 沖縄県 (2017); 本研究 (2006); 証言・伝聞: 球球大学農家政策部 (1966); 伊波 (1966b); 不明: Hiyashi and Suzuki (1971); 米田 (2008); 沖縄県 (2017); 本研究 (2006); 証言・伝聞: 沖縄県 (2017); 本研究 (2020)
27	外地島 Fukajishima	◎	不明	⑥ “座間味村”に 1957~58 [約 83匹] (伊波, 1966b); 宮良, 1972	(i) “座間味島”(宮原ほか, 2015)† (ii) フィールドガイド (2018c)† (iii) 不明: 沖縄県 (2018c)†	直接記録: 岩尾 (2015)†; フィールドガイド (2018c)†; 不明: 沖縄県 (2018c)†
28	宮古諸島 Miyako Islands	◎	1967~71	① 1967 [531匹] (Uchida, 1969) ② 1967~71* [3204匹] (宮良, 1972) ③ 1967~71 [3204匹] (内田・宮良, 1972; 白石, 1982)	(i) 鹿児島県本土部と種子島 (小原, 1967) (ii) 鹿児島県と隣県 (小柳ほか, 1969)	直接記録: 岩尾 (1993); 沖縄県 (2017); 岩尾 (2019)† フィールドガイド (2018c)†; 不明: 沖縄県 (2018)† 証言・伝聞: 諸田 (1984); 不明: 嵩原まか (2013); 不明: 岩尾 (1993); 沖縄県 (2020)

表1のつづき

番号	鳥名	生息状況	推定定着時期	移入に関する情報		生息と消滅に関する情報
				移入時期・[移入数]・[文獻]	移入に関する記録	
29	池間島 Kemajima	◎	1965～68	① 1967～68 [62匹] (Uchida, 1969; 内田・宮良, 1972); 白石, 1982	イタチの原産地 直接記録・沖縄県生息記録 (手法別) フイルトサイン：沖縄県 (2023) † 不明：沖縄県 (2020)	生息しないという住民の証言を紹介 (城間, 2019)
30	伊良部島 Iriabujima	◎	1965～68	① [196*] [41匹] (江原・小柳, 1969) ② 1965～68 [伊良部島と下地島に732匹] Uchida, 1969; 内田・宮良, 1972; ③ 1965～68 [伊良部島と下地島に732匹] 宮古地方厅, 1970 ④ 1967～68* [732匹] (宮良, 1972) ⑤ 1966頃 (久見, 2013)	直接確認：当山 (1960); 沖縄県 (2017) †; 城間 （i）鹿児島県本土部と種子島 (小柳ほか, 1969) （ii）鹿児島県本土部か種子島 (小柳ほか, 1967) （iii）鹿児島県および隣県 (小柳ほか, 1969) （iv）河内ほか (2018) † 証言・伝聞：松井 (1971); 諸喜田 (1984); 当山ほか (1984); 畠山 (1997); 米田 (2008); 不明：宮城 (1983); 嵐原ほか (1997); 米田 (2008); 沖縄県 (2020)	生息しないといふ住民の証言を紹介 (城間, 2019)
31	下地島 Shimojijima	◎	1965～68	① [196*] [1匹] (江原・小柳, 1969) ② 1965～68 [伊良部島と下地島に732匹] Uchida, 1969; 内田・宮良, 1972; ③ 1965～68 [伊良部島と下地島に732匹] 宮古地方厅, 1970 ④ 1967～68* [200匹] (清水, 2013)	直接確認：沖縄県 (2017) †; 城間 (2019) †; 沖縄県 （i）鹿児島県本土部と種子島 (小柳ほか, 1969) （ii）鹿児島県と隣県 (小柳ほか, 1967) （iii）鹿児島県と隣県 (小柳ほか, 1969) （iv）鹿児島県と隣県 (小柳ほか, 1969)	（i）「導入当初は多数生息していたが、最近は数年に一度見る程度」とい う住民の証言を紹介 (沖縄県, 2017) （ii）「8年まえぐくらから男ない、以前は日に5、6頭は見た」、「イ タチは住んでないと思う」という住民の証言を紹介 (城間, 2019, p. 475)
32	来間島 Kurimajima	?	1965～67	① 1965～67* [7匹] Uchida, 1969; 内田・宮良, 1972; ② 1967～68* [7匹] (宮良, 1972) ③ 1970頃 (久見, 2013)	直接確認：沖縄県 (2013) 証言・伝聞：諸喜田 (1984); 当山ほか (2013) （i）鹿児島県本土部と種子島 (小柳ほか, 1969) （ii）鹿児島県と隣県 (小柳ほか, 1967) （iii）鹿児島県と隣県 (小柳ほか, 1969)	（i）「導入当初は多数生息していたが、最近は数年に一度見る程度」とい う住民の証言を紹介 (沖縄県, 2017) （ii）「8年まえぐくらから男ない、以前は日に5、6頭は見た」、「イ タチは住んでないと思う」という住民の証言を紹介 (城間, 2019, p. 475)
33	多聞島 Taramajima	◎	1965～68	① 1965* [264匹] (江原・小柳, 1969) ② 1965～68 [472匹] Uchida, 1969; 宮古地方厅, 1970; 内田・宮良, 1972; ③ 1965～68* [142匹] (宮良, 1972) ④ 1967～68* [235匹] 多聞村説明会委員会, 1973 ⑤ 1967～68* [250匹] (清水, 2013) ⑥ 1967～68* [250匹] (久見, 2013)	直接確認：沖縄県 (2018c) † 証言・伝聞：城間 (2019) （i）鹿児島県本土部と種子島 (小柳ほか, 1967) （ii）鹿児島県と隣県 (小柳ほか, 1969) （iii）鹿児島県 (久見, 2013)	絶滅した。いなくなつた等の住民の証言を紹介 (島村, 2013)
34	八重山諸島 Yawayama Islands		1965～68	① 1965～66 [860匹] (伊波, 1966b) ② 1965～67* [1711匹] (江原・小柳, 1969) ③ 1965～68* [2074匹] (Uchida, 1969) ④ 1966～71* [3077匹] (八重山地方厅, 1972) ⑤ 1965～71* [3097匹] (宮良, 1972) ⑥ 1965～71* [3097匹] (宮良, 1972) ⑦ 1965～66 [113匹] (白石, 1982) [注2]	直接確認：1970年代に目撃 (安間, 2001) 証言・伝聞：松井 (1990); 人重山地方厅 (1972)	絶滅した。いなくなつた等の住民の証言を紹介 (島村, 2013)
35	竹富島 Taketomajima		1965～66	① 1965～66 [113匹] (伊波, 1966b) ② 1965～67* [125匹] (竹富町, 1966) ③ 1965～68* [572匹] (Uchida, 1969) ④ 1967～68* [201匹] (宮良, 1972) ⑤ 1965～68* [202匹] (今泉・今良, 1975) ⑥ 1965～68* [319匹] (宮良, 1972) ⑦ 1965～68* [319匹] (宮良, 1972) ⑧ 1965～68* [33匹] (竹富, 1990)	直接確認：小原 (1967) 証言・伝聞：諸喜田 (1984); 松井 (1971); 人重山地方厅 (1972) （i）鹿児島県本土部と種子島 (小原, 1967) （ii）鹿児島県と隣県 (小柳ほか, 1969) （iii）種子が島と能原島風蓮華 都宮之嶋の業者が持ち移入」(今泉, 今良, 1975) （iv）「種子が島と能原島風蓮華 都宮之嶋の業者が持ち移入」(今泉, 今良, 1975, p. 22)	イタチはいない。導入されていない等の住民の証言を紹介 (島村, 2013)
36	小丘島 Kohamajima		1965～68*	① 1965～68* [125匹] (竹富町, 1966) ② 「竹富町」に1965～67* [572匹] (Uchida, 1969) ③ 1965～68* [319匹] (竹富町, 1969) ④ 1967～68* [201匹] (宮良, 1972) ⑤ 1965～68* [319匹] (Uchida, 1969; 内田・宮良, 1972) ⑥ 1965～68* [319匹] (宮良, 1972)	直接確認：小原 (1967) 証言・伝聞：諸喜田 (1984); 松井 (1971); 人重山地方厅 (1972) （i）「畜産状況は判明していない」 (八重山地方厅, 1972, p. 48) （ii）「漁後、1～2年でその姿を見なくなった」という住民に ニホンイタチの生存を尋ねたが、生息しているとの回答は得られなかっ た」 (田中, 2004, p. 31)	（i）「畜産状況は判明していない」 (八重山地方厅, 1972, p. 48) （ii）「姿をかけない」 (今泉・今良, 1975, p. 22) （iii）現在も姿をみるとばらく、痕跡も発見されないので定着しな かつたものと考えられる (竹田・阪口, 1991, p. 99) （iv）イタチはない、見たことない等の住民の証言を紹介 (島村, 2013)
37	黒島 (八重山諸島) Kuroshima (Yayama Islands)		1965～68	① 1965～68* [113匹] (伊波, 1966b) ② 1965～67* [125匹] (竹富町, 1966) ③ 1965～68* [572匹] (Uchida, 1969) ④ 1965～68* [201匹] (宮良, 1972) ⑤ 1965～68* [202匹] (今泉・今良, 1975) ⑥ 1965～68* [319匹] (宮良, 1972) ⑦ 1965～68* [319匹] (宮良, 1972) ⑧ 1965～68* [33匹] (竹富, 1990)	直接確認：小原 (1967) 証言・伝聞：諸喜田 (1984); 松井 (1971); 人重山地方厅 (1972) （i）鹿児島県本土部と種子島 (小原, 1967) （ii）鹿児島県と隣県 (小柳ほか, 1969) （iii）種子が島と能原島風蓮華 都宮之嶋の業者が持ち移入」 (今泉, 今良, 1975) （iv）「種子が島と能原島風蓮華 都宮之嶋の業者が持ち移入」 (今泉, 今良, 1975, p. 22)	イタチはいない。導入されていない等の住民の証言を紹介 (島 村, 2013)
38	西表島 Iriomotejima		1965～68	① 1965～67* [183匹] (小原, 1967) ② 1965～68* [348匹] (竹富町, 1969) ③ 1965～68* [59匹] (Uchida, 1969); 白石, 1982 ④ 1965～68* [178匹] (Uchida, 1969) ⑤ 1965～68* [348匹] (宮良, 1972) ⑥ 1970頃 (島村, 2013)	直接確認：太田 (1981); 宮城 (1982); 嵐原 (1993); 奥土 (2012) †; 戸田ほか (2013) † 証言・伝聞：諸喜田 (1984); 島村 (2013) （i）「全・姿をかけない」 (今泉・今良, 1975, p. 22) （ii）「姿を隠す」 (今泉・今良, 1975, p. 22) （iii）「種子が島と能原島風蓮華 都宮之嶋の業者が持ち移入」 (今泉, 今良, 1975) （iv）「種子が島と能原島風蓮華 都宮之嶋の業者が持ち移入」 (今泉, 今良, 1975, p. 22)	（i）「姿をかけない」 (今泉・今良, 1975, p. 22) （ii）「種子が島と能原島風蓮華 都宮之嶋の業者が持ち移入」 (今泉, 今良, 1975, p. 22)
39	波照間島 Haterumajima	◎	1965～68	① 1965～67* [348匹] (竹富町, 1969) ② 1965～68* [59匹] (江原・小柳, 1969) ③ 1965～68* [348匹] (Uchida, 1969); 内田・宮良, 1972 ④ 1965～68* [178匹] (Uchida, 1969) ⑤ 1965～68* [348匹] (宮良, 1972) ⑥ 1970頃 (島村, 2013)	直接確認：太田 (1981); 宮城 (1982); 嵐原 (1993); 奥土 (2012) †; 戸田ほか (2013) † 証言・伝聞：諸喜田 (1984); 島村 (2013) （i）「全・姿をかけない」 (今泉・今良, 1975, p. 22) （ii）「姿を隠す」 (今泉・今良, 1975, p. 22) （iii）「種子が島と能原島風蓮華 都宮之嶋の業者が持ち移入」 (今泉, 今良, 1975) （iv）「種子が島と能原島風蓮華 都宮之嶋の業者が持ち移入」 (今泉, 今良, 1975, p. 22)	（i）「姿をかけない」 (今泉・今良, 1975, p. 22) （ii）「種子が島と能原島風蓮華 都宮之嶋の業者が持ち移入」 (今泉, 今良, 1975, p. 22)
40	北大東島 Kitaido Daito Islands	◎	1965～67	① 1965～66* [12匹] (伊波, 1966b) ② 1965～67* [59匹] (江原・小柳, 1969) ③ 1965～68* [67匹] (Uchida, 1969); 内田・宮良, 1972 ④ 1965～68* [178匹] (Uchida, 1969) ⑤ 1965～68* [348匹] (宮良, 1972) ⑥ 1965～67* [178匹] (宮良, 1972)	直接確認：太田 (1981); 宮城 (1982); 嵐原 (1993); 証言・伝聞：諸喜田 (1984); 島村 (2013) （i）「全・姿をかけない」 (今泉・今良, 1975, p. 22) （ii）「姿を隠す」 (今泉・今良, 1975, p. 22) （iii）「種子が島と能原島風蓮華 都宮之嶋の業者が持ち移入」 (今泉, 今良, 1975) （iv）「種子が島と能原島風蓮華 都宮之嶋の業者が持ち移入」 (今泉, 今良, 1975, p. 22)	（i）「姿をかけない」 (今泉・今良, 1975, p. 22) （ii）「種子が島と能原島風蓮華 都宮之嶋の業者が持ち移入」 (今泉, 今良, 1975, p. 22)

表1のつづき

番号	鳥名	生息状況	推定定着時期	移入に関する情報		生息と消滅に関する情報
				移入時期・「移入数」・文献)	イタチの原産地	
41 Minani- Dai tojima	南大東島	◎	1966～67	① 1966 「150匹」(伊波、1966b) ② 1966～67* 「江原・小網」(江原、1966) ③ 1966～67 「481匹」(Ochiai, 1966); 内田・宮良、1972; 白石、 1992. ④ 1966～67* 「481匹」(宮良、1972) ⑤ 1966～67* 「478匹」(南大東村誌編纂委員会、1990)	(i) 鹿児島県本土部と種子島 (小原、1967) (ii) 鹿児島県と薩摩県 (小柳ほか、1969) (iii) 鹿児島県 (宇都宮・伊波、1966b); 諸喜田 (1984) 不明: 内田・宮良 (1972); 高原まさか (1997); 米田 (2008); 沖縄県 (2020)	直接 introducer 大沢 (1997); 原則 (2016); +: 沖縄 県 (2017); +: 小林ほか (2022); †: フィーリートル+; -: Ushida (1960). 証言・伝聞: 伊波 (1966b); 諸喜田 (1984).

注1(口之島): 頭骨を発見。

注2(口之島): 1996年頃にイタチの糞の観察例があることを紹介。

注3(口之島): 2004年に目撃例があることを紹介。

注4(鈴島): 島の出納帳には、1941年と1943年に平島でイタチ捕りを行った旨の記述がある。稻垣 (1971b)は、1943年にイタチと交換するヤギや木材について記述があることより、このときイタチを入手できたとする。また、1948年にも移入に関すると思われる「平島へ出張…イタチ祝」や「イタチ祝」の記述がある (稻垣、1971b)。

注5(平島): 森田 (1995)は平島に由来する中の島産の個体をコイタチとみなししたため、平島のイタチの原産地を屋久島が種子島と推定した。

注6(平島): 大浦展望台周辺で複数の糞を発見した (2024年6月8日)。住民3名に尋ねたところ、全員がイタチではないと回答した。個体数は多いと認識されており、直近で見たのは「今日の朝」や、「過去一週間で2回」という回答があった。

注7(諫訪之瀬島): ナハ浜近くで足跡、御岳登山道で糞を発見した (2024年6月10日)。住民2名にイタチの生息を尋ねたところ、両名ともいると回答した。

注8(喜界島): 森田 (1964)は、1954～58年に「世界島」にイタチ40匹が移入されたとすると、文脈からみて、これは喜界島のことと思われる。しかし、同時期に喜界島産のイタチが他の島に移入されていたことと矛盾している。

注9(奄美大島): これららの移入数は、加計呂麻島・諸島・与路島 (あるいは枝手久、島も)の分を含むと考えられる。

注10(奄美大島): 伊波 (1966b) の表は、年ごとの移入数と集計との間に食い違いがあるため、ここでは年ごとの値を採用した。

注11(枝手久島): 1957年に糞を観察し、イタチの食べ残しを確認。

注12(枝手久島): 森忠義が、当時イタチの糞を観察したことを紹介。

注13(徳之島): 死体の発見例 (1955年) の写真を紹介 (太場, 1962, p. 74)。

注14(徳之島): 「台地一帯で繁殖しているようである」(森田, 1976, p. 126)。

注15(沖永良部島): 御厨 (1969)とそれを引用する鈴木 (2018)は、1949年にもイタチが移入されたとするが、元文献 (四元, 1959) にはそのような記述はない。

注16(与論島): 古里と那間で、イタチ各1個体を目撃 (2024年5月20日)。

注17(沖縄島): 写論島で船から積み降ろしたはずのイタチが、運天港で荷降ろし作業中に上陸。

注18(阿嘉島): 2025年4月に住民3名にイタチの存在を尋ねたところ、全員がいると回答した。そのうち1名は、集落内にある自宅の扉の上を行き来する姿を毎日のように見るとし、直近では昨日見たと述べた。他の2名にはれば、年に数回見る程度で固体数は多くないという。

注19(阿嘉島): 「座間味島より導入する計画」とも記述 (琉球大学農家政学部, 1966, p. 8)。

注20(慶留間島): 「座間味島より導入する計画」とも記述 (琉球大学農家政学部, 1966, p. 8)。

注21(伊良部島): 移入数は、下地島の分も含むと思われる。

注22(竹富島): 移入が行われた記録は無い。伊波 (1966b) の西表島への移入を示す表のタイトル "竹富町" が誤植で "竹富島" になつておらず、白石 (1982) はそれを誤認したと考えられる。

注23(小浜島): 移入数は竹富町全域のもので、各島への移入数は不明。

注24(黒島['八重山諸島']): 住民5名への聞き取り調査の際、1名がイタチの移入があつたと証言した。他の4名はイタチを見たことが無く、うち1人は移入そのものを否定した (島村, 2013)。

注25(西表島): 移入数は竹富町全域のもので、各島への移入数は不明。

注26(波照間島): 移入数は竹富町全域のもので、各島への移入数は不明。

南西諸島に移入されたイタチの由来は、判明した限りでは、おおむね鹿児島県本土部か大隅諸島（屋久島と種子島）、あるいは平島や喜界島等の移入集団とみられる（表 1）。イタチが鹿児島県産に限られた理由は、少なくとも沖縄への移入については、イタチのメスの捕獲、あるいは日本の施政権下にない地域へのイタチの輸出にあたって、県知事による特別な許可が必要であったからだという（たとえば山城、1989a）。ただし、1965 年以降の沖縄向けのイタチには、鹿児島県産だけでなく、その隣県産のイタチも含まれたという記述もある（小柳ほか、1969）。この時期に最大で年度あたり 3000 匹近くに膨らんだ沖縄向けのイタチの需要（宮良、1972）は、鹿児島県内だけではまかないきれなかったのかもしれない。

イタチの移入史

以下では南西諸島におけるイタチの移入史を、地域別に紹介する。

大隅諸島

森田（1984）は、口永良部島をイタチが移入された島のひとつとして挙げている。その一方で、森田（1992）はこの島の陸生動物についての記述の中で、イタチの移入について何も触れていない。

上三島と吐噶喇列島

この地域では、1930 年代後半にネズミ対策として平島（とおそらく他の複数の島）でイタチが移入されたと考えられ、そのうち平島にイタチが定着した。その後はおもに平島産の個体が、ネズミ対策として各島に持ち込まれたとみられる（表 1）。この移入の実態についてはこれまでほとんど知られてこなかつたため、以下で詳しく紹介したい。また、黒島（上三島）では 1949 年頃からドブネズミ *Rattus norvegicus* (Berkenhout, 1769) が増えて農作物に被害が出るようになった（蓑田、1956）。1950 年前後に住民が屋久島産のイタチ 5, 6 匹を購入して放したとされるほか（宮本ほか、1960），1956 年には（おそらく三島村ないし鹿児島県の事業として）“大隅”産のイタチ 40 匹が移入された（森田、1988a）。

吐噶喇列島へのイタチの移入は、二ホンイタチの意図的な移入の嚆矢とされ（徳田、1954；平岩ほか、1959；御厨、1969；白石、1982；鈴木、2018），また“鼠禍”（ネズミ類の大発生）を二ホンイタチの移入で鎮圧した最初の例と言われてきた（たとえば徳田、1954；平岩ほか、1959；御厨、1965）。しかし以下に紹介するように、こうした言説はいざれもある新聞記事における誤りないし脚色に由来すると考えられる。なお、移入時期については聞き取りに基づく異説もあり、島を特定せずに Hikida et al. (1992) は 1940 年代、太田（1996）は 1940 年頃とし、Ota et al. (1994) は平島で戦前、関（2001b）は中之島で 1930 年と記載

している。また、悪石島で「昭和になって」（下野、1994, p. 164），平島で（1964 年の）「30 年ぐらい前」（下野、1994, p. 296）という証言がある（表 1）。

吐噶喇列島へのイタチの移入が広く知られるきっかけとなつたのは、朝日新聞（大阪版）に掲載された大阪市立自然科学博物館（現在の大阪市立自然史博物館）によるトカラ列島科学調査の同行記の一記事（1953 年 6 月 24 日付け）である。調査団の一員でもあった徳田（1954）は、この記事を引き写して「トカラ十島…にもネズミの氾濫した時期があり…それは大正の末期から昭和の初期にかけてのことであった。…島の人々は渡瀬庄三郎博士が琉球ヘマングースを移入してハブを退治したとの話を伝え聞き、これらの島々にイタチを導入した。移入せられたイタチの数が殖えるのに反比例してネズミの数は減少し、1~2 年後には平常に復し、今日に至っている」（pp. 53–54；“…”は本稿著者[中村]による中略）と書いた。御厨（1969）は徳田（1954）を引用し、移入の行われた時期を 1925~27 年（大正 14~昭和 2 年）とした。その後の資料に出てくるこの説におけるイタチの移入年代は、この御厨の記述に由来するとみられる。

吐噶喇列島 [および 1952 年まで共に旧十島村を構成していた上三島（現在の三島村）] の島々では、野山を覆う竹類の結実によってネズミ類 [永井、1938a] によれば、この地域ではクマネズミ *Rattus tanezumi* (Temminck, 1845) が卓越する] の大発生が何度も起きており、その 19 世紀初頭（文化年間）から 1950 年代初頭までの発生年について、情報がよく整理されている（永井、1938a；三友、1954）。ところが、大正末から昭和の初頭を含む 1920 年（大正 9 年）から 1932 年（昭和 7 年）の期間には、これらの島々でネズミ類の大発生が起きた記録は無い。どういうことかというと、徳田（1954）が引き写した新聞記事は、確かに「大正末から昭和にかけ、どの島でもネズミがはびこり」と書いているものの、その内容と取材対象（当時、旧十島村村長であった永田文彦氏）より、(1) 中之島で 1913 年（大正 2 年）に起きたネズミ類の大発生 [きっかけは 1911 年（明治 44 年）のリュウキュウチク *Pleioblastus linearis* Nakai の一斉結実] と、(2) 1933~35 年（昭和 8~10 年）に黒島から悪石島にかけての 5 島で相次いで起きたネズミ類の大発生の逸話がもとになっているらしい。つまり、明治末から大正初めに中之島で起きたことと、昭和 8~10 年に黒島ほか 5 島で起きたことが一緒に記述され、大正末から昭和の初めに吐噶喇列島全域で、と誤って（そして誇張されて）記事に書かれたことになる。そして、1913 年の中之島におけるネズミ騒動は、イタチの移入とは無関係である。たとえば永田文彦氏は別の聞き取り調査でもこの“ネズミ年”的を語っているが、そこにイタチは登場しない（稻垣、1971a）。三友（1954）による別人物からの聞き取り結果も同様である。その一方、1933~35 年に各島で相次いだネズミ類の大発生は、イタチ移入のきっかけであったらしい。

同時代の資料によれば、吐噶喇列島における最初のイタチの移入は、1930 年代後半に行われたとみられる。たとえば、

1935 年の前半までに、この地域にイタチが存在していたことを示す同時代の資料は見つからない。1934 年に行われた上三島と吐噶喇列島における調査の報告（木村, 1935a, b; 永井, 1938a; 早川, 1976）および翌 1935 年 6 月に行われた悪石島の調査記（早川, 1976）には、これらの島々においてネズミ類による被害が報告されている。しかしその対策として、鹿児島県の大島支庁が殺鼠剤を配布したことなどが紹介（早川, 1976）されているだけである。その一方で、1941 年に臥蛇島の住民が、平島にイタチを捕獲しに行った記録が存在する（稻垣, 1971b）。移入早々のイタチを他島から捕獲しに来るとは考えにくいため、平島のイタチの移入時期は、1941 年の数年前とみられる。上述のように、1933 年に臥蛇島、1934 年に黒島・口之島・平島、そして 1935 年には悪石島で竹類が結実した結果、これらの島々でネズミが増えた（永井, 1938a）。吐噶喇ではおよそ 20 年ぶりとなるネズミの大発生であり、しかもそれがたて続けに起きた（永井, 1938a）。この事態に、旧十島村ないしより上位の行政組織が対策を模索した結果、他地域でネズミ対策として行われていた（後述）イタチの移入が選択肢に上がったと考えられる。実際に、1934 年に平島の住民が村長にネズミ被害の視察を請い、その結果イタチを入れることになったという話がある（稻垣, 1976）。なお、葛（1960）はこれを鹿児島県による事業とするが、その根拠は示していない。

吐噶喇列島へのイタチ移入についての通説には、移入年代以外にもいくつかの誤謬がある。まず、ニホンイタチの意図的な移入は、吐噶喇列島で初めて行われたのではない。1935 年の時点では、すでにサハリン・利尻島・礼文島・久住山（大分県）・利島（伊豆諸島）では、ネズミ類による農林業被害への対策として、ニホンイタチの移入が行われていた（岩下・古寺, 1936；犬飼, 1943, 1949；白石, 1982；長谷川, 1986）。そして、件の新聞記事と徳田（1954）およびこれらを引用した文献では、吐噶喇列島におけるネズミの大発生がイタチの移入で沈静化したとするが、これもおそらく誤りである。同時代資料を含む他の文献ではこうした話は皆無で、たとえば平島では竹が枯れた後にネズミが徐々にその数を減らして元の状態に至ったとされること（永井, 1938a）と矛盾している。そのため、吐噶喇列島でイタチの移入が行われたのは、1933～35 年のネズミ大発生が収束した後であった可能性が高い。つまり、吐噶喇列島の“鼠禍”をイタチの移入で鎮圧したという話は、徳田（1954）や御厨（1969）を通じてイタチの移入が挙げた実績の代表例とされてきたものの、実際のところは、新聞記事における脚色が信じられてきたに過ぎないと考えられる。

吐噶喇列島（および上三島も含む旧十島村）へ移入されたイタチの総数について、葛（1960）は根拠を示さずに 70～80 匹とし、御厨（1965）はおそらくそれをもとに 70 匹と書いた。その他に、村内の各島へ 2 つかい（稻垣, 1976）、平島へ 3 つかい（稻垣, 1996）、中之島へは数つかい（関, 2001b）という聞き取り情報がある。これらのイタチの原産地は、鹿児島県の本土部である可能性が高い。たとえば悪石島における聞き取り調査では、

「川辺」（薩摩半島南部）からという証言が得られている（下野, 1994, p. 164）。ただし同じ調査では、平島において「沖エラブ島から」（下野, 1994, p. 296）という証言もあるが、当時の沖永良部島にイタチがいたはずはないので、種子島などの間違いかもしれない。その一方、臥蛇島・中之島・諏訪之瀬島・悪石島では、平島産のイタチを移入したという記録ないし住民による証言がある（表 1）。イタチは平島以外の島でも移入されたものの、放されたイタチは平島に限って定着したといい（稻垣, 1976, 1996），そのため他の島では、ネズミ対策として平島からイタチを入手したらしい。こうした経緯から、各島におけるイタチの移入時期は、初回を除いてそれぞれ異なるはずである。たとえば臥蛇島における平島からのイタチの移入は、1941 年に試みて失敗した後、1943 年と 1948 年に行われている（稻垣, 1971b；表 1）。

奄美群島

奄美群島で最初にイタチが移入されたのは喜界島で、その目的は農業被害をもたらすネズミ類への対策である（豊島, 1994）。移入の経緯については豊島（1994）が直接関わった人の手記をもとに紹介しており、イタチの移入は警察署長の発案だったことや、1942 年に種子島で得た 7 匹を放し、翌年にも加世田（現在の南さつま市）の住人を介して、“数匹”（おそらく鹿児島県本土部産）を移入したと述べている。移入数について、森田（1964）は計 13 匹とする。イタチはその後定着し、喜界島は、奄美群島へ移入するイタチの供給元のひとつとなつた。

移入年や移入数について文献により異同があるものの、1952 年に沖永良部島、1953 年頃に与論島で、イタチが移入された。記録は見つからないものの、その目的はネズミ類による農業被害への対策と考えられ、喜界島の事例を参考にしたとみられる。沖永良部島に移入されたイタチについて、森田（1964）は喜界島産の“コイタチ”であると述べる一方で、“ホンドイタチ”（九州など本土産のイタチ）も移入されたことを示唆している。与論島への移入は与論村（現在の与論町）の事業であり、イタチは喜界島産であった（森田, 1988b）。このとき移入されたイタチは、沖永良部島では定着したもの、与論島では定着しなかったらしい（四元, 1959；伊波, 1966b）。

奄美群島が日本の統治下に復帰した後の 1954～58 年には、奄美大島とその付属島嶼（枝手久島・加計呂麻島・与路島・請島）および徳之島で、奄美群島復興特別措置法に基づく事業の一環として、イタチの移入が行われた（四元, 1959）。これは沖縄におけるフリーリングースの移入にヒントを得たもので、咬症被害をもたらすハブへの対策であるが、同時にネズミ類を減らすという“一石二鳥”的効果が期待されていた（平岩ほか, 1958；四元, 1959）。このとき移入されたイタチは、総計で 2,300 匹前後（Hayashi and Suzuki, 1977；林, 1979；阿部ほか, 1991）であったが、全ての島で定着しなかった（林, 1979；表 1）。これらのイタチの原産地について、四元（1959）は鹿児島県本土部に加え、喜界島を挙げている。同時期（1955～57 年頃）、与論島

では 60～200 匹ほどイタチが移入された。これは初回と違つて鹿児島県の事業という（森田, 1988b）。与論島におけるイタチの定着は、このときの移入の結果と考えられる。その他にも、沖永良部島では 1952 年以来イタチが定着していたものの（御厨, 1966），ネズミ類の大発生による農業被害が出たために、1967 年に再度イタチが移入された（御厨, 1969；秋田, 1975）。1976 年には大島支庁（阿部ほか, 1991）によれば県が組織した“ハブ撲滅推進協議会”によるハブ対策として、与路島に鹿児島県曾於郡産のイタチ 60 匹が放された（瀬戸内町史編纂委員会, 1999）。同島では 1950 年代に次ぐ再度の移入となつたが、その後の目撃情報は無いため、イタチは定着しなかつたらしい（たとえば鮫島, 1989）。

沖縄（沖縄諸島・宮古諸島・八重山諸島・大東諸島）

沖縄で最初にイタチが移入されたのは、沖縄島か座間味村内の 3 島のどちらかである。伊波（1966a）によれば、“9～10 年前”に、沖縄島の運天港において船からウシ *Bos taurus Linnaeus, 1758* を積み下ろした際、イタチ 2, 3 匹（喜界島産で、与論島で荷降ろしされたはずのもの）の上陸が目撃されたという。座間味村内では、1957～58 年にネズミ類による農作物被害対策の目的で、喜界島におけるイタチの移入に関する情報をもとに、鹿児島県からイタチを購入し、座間味島・阿嘉島・慶留間島に放した（伊波, 1966b；宮良, 1972；山城, 1989a）。その結果、座間味島でイタチが定着した（たとえば Uchida, 1969）。1950 年代から 60 年代半ばにかけて、ネズミ類による農作物の被害が沖縄各地で起きていたため（宮良, 1972），座間味村の例に触発されて、久米島の仲里村が 1965 年、石垣島が 1966 年からイタチの移入を始めた（伊波, 1966b）。1967～72 年には、ネズミ類による農業被害への対策として沖縄の 17 島でイタチの移入が行われた（宮良, 1972）。その実施者は各市町村であり、費用の半額を琉球政府が補助した（宮良, 1972）。この間に移入されたイタチは 11,984 匹にのぼった（内田・宮良, 1972；ただしこの移入数には、石垣市などが独自の事業として行った分も含まれる）。イタチの原産地は鹿児島県本土部と種子島とされるものの（小原, 1967；今泉・今泉, 1975），その隣県産のものが含まれたことも示唆されている（小柳ほか, 1969）。なお、沖縄島はイタチの移入の対象とはされなかつた。その理由は、フリーマンゲースがすでに定着しており、イタチとの競合が起きるおそれがあったからだという（内田・宮良, 1972）。

記録に見える限りでは、南西諸島でもっとも最近（1977 年）にイタチが移入されたのは座間味村の阿嘉島である（山城, 1989b）。阿嘉島では 1957～58 年に移入したイタチは定着しなかつたとされるものの（琉球大学農家政学部, 1966；Uchida, 1969；池原, 1974b），1980 年代以降はイタチの生息が確認されている（宮城・三井, 1981；岩尾, 2015）。そのため、現在この島に生息するイタチは、1977 年に放された個体に由来すると考えられる（中村, 2024）。したがって阿嘉島のイタチは、南西諸島におけるイタチの移入集団の中で、定着以後の経過年月がもつ

とも短いことになる。ただし、隣接する慶留間島においても、1957～58 年に移入されたイタチは定着に至らなかつたとされるが（琉球大学農家政学部, 1966；Uchida, 1969；池原, 1974b），現在イタチはこの島に生息する（岩尾, 2015；城間, 2019）。また、外地島（慶留間島の南隣）に生息するイタチの由来についての情報は発見できていない。この両島では、記録に残されなかつたイタチの移入が行われたか、隣の島から橋を伝うなどしてイタチが侵入した可能性が考えられる。

移入の効果についての見方

南西諸島へのイタチの移入が、その目的であるネズミ類やハブの個体数抑制に効果があつたかについては、具体的な情報が乏しい一方で、さまざまな見方がある。たとえば白石（1982）は、南西諸島を含む島嶼に移入されたイタチは、おおむね各島で定着し、所期の成果を上げていると述べた。しかしその評価の根拠は不明で、そのうち沖縄の島々については、後述する Uchida (1969) や内田・宮良 (1972) の調査結果をもとにしているらしい（山田, 2021）。また、イタチが“成果”を上げている島として挙げられた中には、イタチが定着しなかつた南西諸島の 10 島が含まれているが、これらの島でイタチが存在したのは、移入から長くても数年程度に過ぎなかつたはずである。こうしたことが端的に示すように、イタチの移入の効果については、当然あるものとする見方が先行してきた経緯があり、その検証には関心が持たれてこなかつた。

沖縄へのイタチの移入と前後して、Uchida (1968, 1969) と内田・宮良 (1972) は、各島におけるイタチの定着状況とネズミ類による農作物への食害との関係を調べた。彼らは、イタチが定着した島ではおおむねネズミによる食害が減少し、サトウキビ *Saccharum officinarum* L. の収穫量が大幅に増加したとする。その一方で、Wodzicki (1973) は Uchida (1969) のデータを取り上げて、移入の効果と、同時に使用した殺鼠剤の効果との区別ができるないと指摘した。その他にも、奄美群島の枝手久島では、イタチを放した後にイネ *Oryza sativa* L. などへのネズミ類による食害が減少したと農業従事者が証言した（木場, 1962）。しかしこの島ではイタチは定着しなかつたので、ネズミ類による被害は元通りとなつた（伊波, 1966）。

興味深いことに、イタチが定着した島では、住民などが、イタチによるネズミ類の個体数抑制効果を認めるケースが多い。その例として平島（下野, 1994）・喜界島（四元, 1959；伊波, 1966b；豊島, 1994）・沖永良部島（四元, 1959）・与論島（四元, 1959；森田, 1988b）・座間味島（伊波, 1966b；Uchida, 1969；閔口ほか, 2002）・波照間島（宮城, 1983；島村, 2013）などが挙げられる。その他、三友（1954）は、イタチの定着した中之島・平島・悪石島では鼠害が減少しているが、口之島と臥蛇島ではイタチが繁殖しないためか、鼠害がはなはだしかつたと書いた。斎藤ほか（1980）は、平島ではネズミに食害されやすい水稻

栽培が 1930 年代に急速に普及したとし、それはイタチの移入によってネズミの密度が低下し、水稻への食害が減ったからだとする。下野（1994）も同様な証言を聞き取っている。

対照的に、イタチが定着していても、ネズミ類の個体数が抑えられるわけではないことを示す研究結果もある。清水（2013）は、宮古島市（宮古島・伊良部島・下地島など）ではイタチの定着後もネズミ類によるサトウキビの食害は減少しなかつたこと、そしてネズミ類に対して効果があったのは、その後に行われた殺鼠剤を用いた防除であったことを指摘した。実際に、宮古島ではイタチの移入後もネズミ類による農作物の被害が収まらず、1972, 74 年には住民からネズミの尾の買い上げを行っている（清水、2013）。似たような例は他にもあり、たとえば沖永良部島では、イタチが定着していたにもかかわらず、1966 年にネズミ類の大発生が起きたため、殺鼠剤の大量使用などの措置とともに、イタチの追加移入が行われた（秋田、1975）。

奄美群島で行われたハブ対策としてのイタチ移入の効果については、さらに情報が乏しい。四元（1959）や木場（1962）は、枝手久島ではイタチの移入後に、ハブの個体密度が顕著に減少したとする。しかし、枝手久島を含むハブの生息する島では、移入されたイタチは定着することなく、すぐに姿を消してしまった（たとえば四元、1959）。また、そもそもイタチがハブを捕食できるかどうかについても見解が分かれている。たとえば高良（1973）はイタチとハブを戦わせる実験に立ち会ったと述べ、イタチはマンゴースほど積極的でないが、ハブをとる技はマンゴースに劣らないと評した（ただし、ときたま不覚をとるとも付け加えた）。服部（2000）は、実験下でイタチがハブによって殺された事例があるとする。その他、徳之島において、死んだハブの胃内からイタチの死体が見つかった事例が報告されている（木場、1962）。

在来陸生動物への影響

在来種の被捕食・減少・局所化・絶滅

南西諸島に移入されたイタチが、在来の陸生動物を捕食していることを示す証拠は少なくない。たとえば中之島ではアカヒゲ *Larvivora komadori* (Temminck, 1835) の卵や雛が捕食されているほか、イタチの糞からアカヒゲの成鳥を含む鳥類の羽毛が発見されている（関、2001a, b）。また、吐噶喇列島（どの島かは記載が無い）におけるアカヒゲの営巣調査では、イタチと推測される捕食者によって、調査巣の 65% で卵や雛が消失した（関、2012a）。喜界島では鳥類の巣がイタチに襲われている可能性を示す実験結果が得られており（坂上ほか、2011），南大東島のイタチとネコは、ダイトウコノハズク *Otus elegans interpositus* Kuroda, 1923 の営巣失敗の約 1 割に関係していると考えられている（Takagi et al., 2007）。

座間味島では、イタチの糞内容物の分析により、ワタセジネズミ *Crocidura watasei* Kuroda, 1924, “ウグイス亜科 (Sylviinae)”

の鳥、そしてオキナワキノボリトカゲ *Diploderma polygonatum polygonatum* Hallowell, 1861 の被捕食が確認されている（関口ほか、2002）。同じ座間味島では、イタチがアオウミガメ *Chelonia mydas* (Linnaeus, 1758) を含むウミガメ類の卵や孵化幼体を捕食していることも報告されている（福永、1999；山本ほか、2023）。宮古島・伊良部島・下地島に生息するイタチの糞内容物の分析を行った結果、ミヤコカナヘビ *Takydromus toyamai* Takeda et Ota, 1996, サキシマキノボリトカゲ *Diploderma polygonatum ishigakiense* (Van Denburgh, 1912), キシノウエトカゲ *Plestiodon kishinouyei* (Stejneger, 1901), ミヤコヒメヘビ *Calamaria pfefferi* Stejneger, 1901, サキシマバイカダ *Lycodon multifasciatus* (Maki, 1931), サキシマヌマガエル *Fejervarya sakishimensis* Matsui et al., 2007, ヒメアマガエル *Microhyla okinavensis* Stejneger, 1901 などが捕食されていたことが確認された（沖縄県、2018b；河内ほか、2018）。その他にも、木場（1962）は、枝手久島でイタチの食べ残しと思われるオオシマトカゲ *Plestiodon oshimensis* (Thompson, 1912) の死体を見つけた。Uchida (1968, 1969) は、座間味島・伊良部島・下地島・南大東島でイタチの糞から鳥類の羽毛など体の一部を発見した。Uchida (1968, 1969) はまた、石垣島ではバン *Gallinula chloropus* (Linnaeus, 1758) などがイタチに襲われており、その他にもイタチに食べられたであろうヤエヤマアオガエル *Zhangixalus owstoni* (Stejneger, 1907) などの死体の発見事例を報告している。

節足動物では、大東諸島固有のダイトウヒメハルゼミ *Euterpnosia chibensis daitoensis* Matsumura, 1917 をはじめ（城間、2016），各島でさまざまな昆虫がイタチに捕食されている（Uchida, 1969；服部, 2000；関口ほか, 2002；河内ほか, 2018；小林ほか, 2022）。小林ほか（2022）は、南大東島固有で絶滅が危惧されているヒサマツサイカブト *Oryctes hisamatsui* Nagai, 2002 の死体に、イタチの歯型が付いていた事例（未公表資料における報告）を紹介した。その他、座間味島・石垣島・南大東島ではカニ類をはじめとする甲殻類、トタテグモ科 *Ctenizidae* などのクモ類、オオムカデ科 *Scolopendridae* のムカデ類、アシヒダナメクジ *Laevicaulis alte* (Ferussac, 1821) などの被捕食が確認されている（Uchida, 1968, 1969；関口ほか, 2002；小林ほか, 2022）。

イタチの捕食が、在来陸生動物の個体数や分布域の減少に関与した可能性も示唆してきた。たとえばイタチが定着した島では、近隣のイタチの生息しない島と比べ、トカゲ類・ヘビ類などの陸生爬虫類や、ミフウズラ *Turnix suscitator* (Gmelin, 1789) のような地表の利用頻度が高い鳥類の生息密度が低いことが、黒島（森田、1988a）・喜界島（鮫島、1995；当山、2010）・沖永良部島（柴田、1964；竹中、2006）・与論島（中村、2016）・座間味島（池原、1974b；当山、1983；宮城・当山、1988；嵩原ほか、1995）・慶留間島（宮城・三井、1981；当山、1983）・伊良部島（当山、1981b, 1990a；宮城、1983；宮城・当山、1988）・下地島（当山、1981b）・波照間島（太田、1981；嵩

原ほか, 1998; 奥土, 2012)で指摘されている(太田, 1996, 2002; 嵩原ほか, 1997; 太田・増永, 2004; 太田ほか, 2015 も参照). そして永井(1938b)は、黒島(上三島)にニホントカゲ *Plestiodon japonicus* (Peters, 1864), 畏蛇島にニホンカナヘビ *Takydromus tachydromoides* (Schlegel, 1838)が分布するとしているが、どちらもその後の調査では発見されていない(Ota et al., 1994; 前之園・戸田, 2007). そのうち黒島のニホントカゲについて、発見されないのはイタチの捕食による影響だと森田(1988a)は考えた. また、Ota et al. (1994)は、畏蛇島のニホンカナヘビが発見されないことについて、移入されたヤギ *Capra hircus* Linnaeus, 1758 とニホンジカ *Cervus nippon* Temminck, 1836 による草本植生の破壊が、イタチによるニホンカナヘビの発見と捕食を促進させた可能性を示唆している.

一部の島では、在来種の減少あるいは消滅は、イタチの移入に続いていることがわかっている. たとえば平島と悪石島では、イタチの移入後に“トカゲ”がいなくなったと住民が証言している(下野, 1994; 太田, 1996). このトカゲはトカゲ属 *Plestiodon* のものと考えられ、永井(1938b)は両島産の個体はその鱗相が特異であると指摘していたが、その後このトカゲは発見されていない(Hikida et al., 1992; Ota et al., 1994; 太田, 1996; Kurita and Hikida, 2014; ただし森田, 1995, p. 173 も参照). 喜界島と沖永良部島では、イタチの移入後にヘビ類が姿を消し、座間味島では同様にヘビ類・トカゲ類・カエル類が数を減らしたとの証言が得られている(喜界島については豊島, 1994, 沖永良部島については柴田, 1964; 鮫島, 1983; 竹中, 2006, 座間味島については Uchida, 1969; 関口ほか, 2002; 笹井・大嶋, 2010). 同様に、波照間島ではイタチの移入後にミフウズラ・キシノウエトカゲ、サキシマアオヘビ *Cyclophiops herminiae* (Boettger, 1895), サキシママダラ *Lycodon rufozonatus walli* (Stejneger, 1907), ヤシガニ *Birgus latro* (Linnaeus, 1767)が見られなくなったという(当山ほか, 2013; 島村, 2013). その他、阿嘉島における在来陸生ヘビ類の標本・目撃記録は、1959 年から 1981 年までに 4 種 11 個体あったものの、その後は 2024 年のガラスヒバア 1 個体まで 42 年も途絶えた. こうした記録の空白が生じたおもな原因として、1977 年に移入されてその後定着したイタチが、捕食により陸生ヘビ類の生息密度を低下させたことが疑われる(中村, 2024).

イタチによる捕食が一因と指摘される在来種の分布の局所化も知られており、沖永良部島のアオカナヘビ *Takydromus smaragdinus* (Boulenger, 1887)はその例である(竹中, 2006, 2014; 中村, 2008; 小林, 2018). 笹井・大嶋(2010)は、座間味島のオキナワトカゲ *Plestiodon marginatus* Hallowell, 1861 が集落内でのみ確認されたことより、集落内ではイタチによる捕食圧がかかりにくいと考察した. 澤田ほか(2023)も、波照間島のキシノウエトカゲはおもに集落内で生息が確認されるとして、集落周辺では住処に好適な環境が存在することとともに、イタチの捕食圧が低い可能性を示唆している.

そのほか、与論島では脊椎動物遺骸の調査により、オキナワ

アオガエル *Zhangixalus viridis* (Hallowell, 1861)・ガラスヒバア *Hebius pryeri* (Boulenger, 1887)・アマミヒメトカゲ(ヘリグロヒメトカゲ) *Ateuchosaurus pellopleurus* (Hallowell, 1861)ないし近縁種のオキナワヒメトカゲ *A. okinavensis* (Thompson, 1912)・アマミヤモリ *Gekko vertebralis* Toda et al., 2008 あるいは“オキナワヤモリ” *Gekko* sp.と思われるヤモリ・ヨロントカゲモドキ *Goniurosaurus yunnu* Nakamura et al., 2014(与論島固有種)の 5 種が近世以降にこの島から消えたことが示されており、イタチの定着は、生息環境の消失とともに、これらの種の消滅に関与した可能性がある(Nakamura et al., 2009, 2013, 2014; 中村, 2016).

陸上生態系への影響

伊豆諸島の三宅島では、移入されたニホンイタチがオカダトカゲ *Plestiodon latiscutatus* Hallowell, 1861 やアカコッコ *Turdus celaenops* Stejneger, 1887などを捕食して個体数を減少させた結果、これらの在来種と餌を巡って競争関係にあるオオヒラタシデムシ *Eusilpha japonica* (Motshulsky, 1860)が増加し、その一方でオカダトカゲを餌とするサシバ *Butastur indicus* (Gmelin, 1788)の飛来が減少するなど、島の陸上生態系にも影響が及んだ(高木・樋口, 1992; Hasegawa, 1999, 2003; 樋口, 2002; 長谷川, 2017). 三宅島を含む同諸島の 4 島へのイタチの移入の影響は、周辺の島々の鳥類群集にも及んだとする見方もある(Iijima et al., 2025). 南西諸島の場合、イタチの移入の結果として起きた生態系の変化は知られていない. ただし、座間味島と喜界島では、イタチの移入によりネズミ類が減少した結果、ネズミ類が餌としていた陸貝類が増えたとされている(伊波, 1966b).

イタチの影響と在来陸生動物の保全

前章で紹介した証拠より、南西諸島に移入されたイタチは、捕食を通じて在来の陸生動物に対し広範で、ときには深刻な影響を及ぼしてきた可能性がある. しかしその実態については情報が限られており、不明な点が多い. たとえば、いくつかの島では動物相の調査が行われる前にイタチが定着したために、両生類や陸生爬虫類といった小動物の種多様性が過小評価されている可能性も示唆されている(太田ほか, 2015; 中村, 2016). また、南西諸島では過去数十年の間に、開発などによって環境が大きく変容しており、在来陸生動物の多くは、程度の差はあるもののその影響を受けてきたと考えられる. こうした要因がもたらした在来種の生息状況の変化についての知見もほとんどなく、イタチの影響との区別が難しいのが現状である(たとえば戸田ほか, 2013).

このような状況がある中で、イタチが生息する島の在来陸生動物の保全のためにまず求められるのは、在来種の被捕食状況の調査である. こうした調査を通じて、たとえば前章で挙げら

れた在来陸生動物へのイタチの捕食圧について、その有無を確かめることができるかもしれない。また、低密度や局所的であるなど、個体群の存続に懸念がある種に対するイタチの捕食圧の有無についても分析される必要がある。食性の幅が広いイタチには多様な餌の選択肢があり(岸田, 1927; 湯川, 1968; 御厨, 1969; 大津, 1971; 朝日, 1975; 藤井ほか, 1998; Kaneko et al., 2009; Okawara et al., 2014; 土井ほか, 2017; 土井・倉西, 2018; 小林ほか, 2022), そこにはクマネズミのような高い繁殖力を持つ種も含まれる。こうした餌に困りにくいイタチは高い生息密度を維持でき、その結果として、在来種が低密度や局所的だとしても、捕食圧を加えることができると考えられている(亘, 2016; 戸田・高橋, 2018)。

そして、イタチの捕食によって影響を受けやすい在来種の特定も必要である。伊豆諸島では、捕食者であるヘビ類のいる島のオカダトカゲは、もともと天敵に対する回避行動や、捕食圧が高い環境で世代を繋ぐことが可能な生活史を持つことなどにより、ヘビのいない島のトカゲと比べて、イタチの移入の影響がより小さかったと考えられている(Hasegawa, 2003 およびそこで引用されている文献を参照)。その類推により、南西諸島のイタチが定着している島の在来陸生動物のうち、在來の捕食者による捕食圧が少ない種ないし個体群は、イタチの捕食に対してより脆弱であると予想される。こうした種や個体群が特定され、その生息状況の動向が適切にモニタリングされていくことが望まれる。

謝 辞

本稿で用いた資料の一部について、稻留陽尉(鹿児島県環境技術協会)・岡本康汰(琉球大学大学院理工学研究科[当時])、佐々木健志(琉球大学博物館[風樹館])・田村常男(沖縄県)・戸田守(琉球大学熱帯生物圏研究センター)の各氏(名前順、敬称略)から提供、あるいは入手に際して便宜を図っていただきました。また、匿名の査読者 2 名には原稿へのコメントや修正をしていただきました。ここにお礼申し上げます。

利益相反

本研究を実施するにあたり、特定企業との利害関係はありません。

引用文献

阿部 永. 1959. 屋久・種子・奄美のネズミとイタチ(2). 野ねずみ, 31, 4.
阿部慎太郎・高槻義隆・半田ゆかり・和 秀雄. 1991. 奄美大島におけるマンガース(*Herpestes* sp.)の定着. 哺乳類科学, 31, 23–36.

- 秋田悦史. 1975. 沖永良部島からのねずみの便り. 野ねずみ, 127, 36.
秋吉 茂. 1964. 美女とネズミと神々の島. 河出書房新社, 東京.
悪石島小中学校. 2021. 招かれざる客. 鹿児島郡十島村立悪石島小中学校 blog (2021 年 4 月 15 日).
<http://www.tokaras.jp/school/akuseki/2021/04/> (参照 2025-09-26)
朝日 稔. 1975. 近畿地方捕獲のイタチの消化管内容物—特にその力口リ—量に関連して. 動物学雑誌, 84, 190–195.
Doherty, T. S., Glen, A. S., Nimmo, D. G., Ritchie, E. G. and Dickman, C. R. 2016. Invasive predators and global biodiversity loss. *Proceedings of the National Academy of Sciences*, 113, 11261–11265.
土肥昭夫・岡村麻生. 2023. イリオモテヤマネコの暮らす島—「水の島」西表. 土肥昭夫・伊澤雅子(編), イリオモテヤマネコ—水の島に生きる. 東京大学出版会, 東京.
土井 学・倉西良一. 2018. 伊豆諸島八丈島における国内外来種ニホンイタチの糞による食性分析. 日本生物地理学会会報, 72, 113–125.
土井 学・西海 功・倉西良一. 2017. 伊豆諸島利島における国内外来種ニホンイタチの在来種への影響. 日本生物地理学会会報, 71, 53–62.
江原秀典・小柳和助. 1969. 狩猟制度. 林野庁(編), 鳥獣行政のあゆみ. 林野弘済会, 東京, pp. 259–374.
栄多克敏. 2000. 自然と地理. 喜界町誌編纂委員会(編), 喜界町誌. 喜界町, 喜界, pp. 1–28.
藤井 猛・丸山直樹・神崎伸夫. 1998. 多摩川中流域河川敷におけるニホンイタチの食性の季節的变化. 哺乳類科学, 38, 1–8.
福永純子. 1999. イタチによるウミガメ産卵巣食害についての報告. うみがめニュースレター, 42, 3–4.
長谷川雅美. 1986. 三宅島へのイタチ放散 その功罪. 採集と飼育, 48(10), 444–447.
Hasegawa, M. 1999. Impacts of the introduced weasels on the insular food webs. In Ota, H. (ed.), *Tropical Island Herpetofauna: Origin, Current Diversity, and Conservation*. Elsevier Science B. V., Amsterdam, pp. 129–154.
Hasegawa, M. 2003. Ecological diversification of insular terrestrial reptiles: A review of the studies on the lizard and snakes of the Izu Islands. *Global Environmental Research*, 7, 59–67.
長谷川雅美. 2017. 伊豆諸島におけるイタチ導入: 歴史と事実と教訓. *Mikurensis*, 6, 56–61.
長谷川善和. 1985. ピンザアブ洞穴産出のヤマネコ・コウモリ類・ケナガネズミ. 沖縄県教育庁文化課(編), 沖縄県文化財調査報告書 第68集: ピンザアブ. 沖縄県教育委員会, 那覇, pp. 83–91.
橋本琢磨・諸澤崇裕・深澤圭太. 2016. 奄美から世界を驚かせよう—奄美大島におけるマンガース防除事業、世界最大規模の根絶へ. 水田 拓(編), 奄美群島の自然史学—亞熱帶島嶼の生物多様性. 東海大学出版部, 平塚, pp. 290–312.
服部正策. 2000. マングース. 林 良博・武内和彦(編), マングースとハルジオン—移入生物とのたたかい. 岩波書店, 東京, pp. 1–65.
早川孝太郎. 1976. 早川孝太郎全集第9巻 島の民俗. 未来社, 東京.
林 良博. 1979. 南西諸島の動物たち—とくにハブとアマミノクロウサギ. 科学, 49, 616–619.

- Hayashi, Y. and Suzuki, H. 1977. Mammals. In Sasa, M., Takahasi, H., Kano, R. and Tanaka, H. (eds.), *Animals of Medical Importance in the Nansei Islands in Japan*. Shinjuku Shobo, Tokyo, pp. 9–28.
- 林田重幸. 1968. 奄美諸島の哺乳動物. 海中公園センター(編), 海中公園センター調査報告 1. 奄美群島自然公園予定地基本調査書. 鹿児島県, 鹿児島, pp. 153–159.
- 樋口広芳. 2002. イタチ放逐後の三宅島の動物相—在来種の減少のほか、行動の変化も. 日本生態学会(編), 外来種ハンドブック. 地人書館, 東京, p. 235.
- Hikida, T., Ota, H. and Toyama, M. 1992. Herpetofauna of an encounter zone of Oriental and Palearctic elements: Amphibians and reptiles of the Tokara Group and adjacent islands in the Northern Ryukyus, Japan. *Biological Magazine Okinawa*, 30, 29–43.
- 平岩馨邦・太田嘉四夫・宇田川竜男・佐藤惇夫・松井孝爾・内田照章. 1958. 奄美群島生物調査報告—特に鼠と蛇との関係を追求して. 九州大學農學部學藝雜誌, 16, 525–546.
- 平岩馨邦・内田照章・濱島房則. 1959. 延岡市サギ島における鼠禍(II). 駆除対策とその効果—特に天敵イタチの導入について. 九州大學農學部學藝雜誌, 17, 335–349.
- 伊波興清. 1966a. マングースの分布と食性について. 沖縄農業, 5(2), 39–44.
- 伊波興清. 1966b. 野鼠の天敵としてのイタチの導入記録. 沖縄農業, 5(2), 45–53.
- Iijima, D., Ando, H., Inoue, T., Murakami, M., Ito, S., Fukuda, S., and Sato, N. J. 2025. Ongoing collapse of avifauna in temperate oceanic islands close to the mainland in the Anthropocene. *Journal of Animal Ecology*, 94, 1694–1706.
- 池原貞雄. 1974a. 久米島の陸上脊椎動物. 沖縄自然研究会(編), 久米島県立自然公園候補地学術調査報告. 沖縄県, 那覇, pp. 89–98.
- 池原貞雄. 1974b. 慶良間群島の陸上脊椎動物. 沖縄自然研究会(編), 沖縄海岸国定公園拡張候補地学術調査報告—国頭村東海岸・伊江島・慶良間島. 沖縄県, 那覇, pp. 187–199.
- 池原貞雄. 1981. 琉球列島久米島における土地利用形態の変化による脊椎動物数種の分布域の変動. 池原貞雄(編), 琉球列島における島嶼生態系とその人為的変革 II. 南西印刷, 那覇, pp. 161–172.
- 池原貞雄. 1986. 北大東島の動物. 北大東村誌編集委員会(編), 北大東村誌. 北大東村, 北大東, pp. 70–76.
- Ikehara, S., Izawa, M., Sakaguchi, N., and Morita, T. 1994. Mammals of Tokara Islands. *WWF Japan Science Reports*, 2(2), 179–185.
- 今泉吉典・今泉忠明. 1975. イリオモテヤマネコの生息地としての西表島. 環境庁(編), イリオモテヤマネコの生態及び保護に関する研究第一次報告. 環境庁, 東京, pp. 5–34.
- 稻留陽尉・塩谷克典・岡田 滋・鹿児島県環境林務部自然保護課. 2014. トカラ列島口之島で確認されたテン *Martes melampus*. *Nature of Kagoshima*, 40, 7–11.
- 稻垣尚友. 1971a. トカラの伝承. ポン工房, 東京.
- 稻垣尚友. 1971b. 臥蛇島金銭入出帳. 十島村誌 臥蛇島編 資料(一). かんぺい工房, 鹿児島.
- 稻垣尚友. 1976. 吐火羅國一針の穴から日本をのぞく. 八重岳書房, 東京.
- 稻垣尚友. 1996. 密林の中の書斎—琉球弧北端の島の日常. 霊社, 東京.
- 井上 繁. 1990. イタチは砂糖キビの救世主—イタチ保護条例 沖縄県多良間村. 晨, 9(10), 132–134.
- 犬飼哲夫. 1943. 野鼠驅除と馳. 権太山林會報, 57, 9–13.
- 犬飼哲夫. 1949. 野鼠驅除のため北海道近島へイタチ放飼とその成績. 札幌博物學會報, 18(3-4), 56–59.
- 岩尾研二. 2015. 慶良間列島の外来動物. みどりいし, 26, 24–34.
- 岩下 峻・古寺小次郎. 1936. 放馳による野鼠の駆除及其効果. 日本林學會誌, 18(12), 17–25.
- 伊澤雅子. 2015. 哺乳類. 沖縄県教育府文化財課資料編集班(編), 沖縄県史 各論編 第1卷 自然環境. 沖縄県教育委員会, 那覇, pp. 674–683.
- 鹿児島県. 2017. ニホンイタチ(コイタチ). 鹿児島県侵略的外来種力ルテ. 鹿児島県ホームページ.
http://www.pref.kagoshima.jp/ad04/documents/58074_20170401113833-1.pdf(参照 2025-09-26)
- Kaneko, Y., Shibuya, M., Yamaguchi, N., Fujii, T., Okumura, T., Matsubayashi, K. and Hioki, Y. 2009. Diet of Japanese weasels (*Mustela itatsi*) in a sub-urban landscape: Implications for year-round persistence of local populations. *Mammal Study*, 34, 97–105.
- 環境省. 2014. 生態系被害防止外来種リスト. 環境省ホームページ.
<https://www.env.go.jp/nature/intro/outline/iaslist.html>(参照 2025-09-26)
- 河内紀浩・中村泰之・渡邊環樹. 2018. 国内由来の外来種ニホンイタチ *Mustela itatsi* による絶滅危惧種ミヤコカナヘビ *Takydromus toyamai* の捕食. 哺乳類科学, 58, 73–77.
- 葛 精一. 1960. 野鼠の天敵としての「いたち」の利用. 山脈, 11(12), 10–16.
- 木村修三. 1935a. 舊川邊十島農業一覽記. 農業と經濟, 2(1), 157–172.
- 木村修三. 1935b. 舊川邊十島農業一覽記(承前). 農業と經濟, 2(2), 132–146.
- 岸田久吉. 1927. 獵期ニ於ケルいたちノ食性調査成績. 鳥獸調査報告, 4, 121–160.
- 北大東島の動物図鑑編さん室. 2019. 北大東島の動物図鑑. 北大東村, 北大東.
- 木場一夫. 1962. 奄美群島及びトカラ群島産ハブ属に関する研究. 日本学術振興会, 東京.
- 小林海瑠. 2018. 沖永良部島におけるアオカナヘビの記録と生息状況. *Akamata*, 28, 29–33.
- Kobayashi, S., Kinjo, T., Kuroda, Y., Kinjo, M., Okawara, Y., Izawa, M., Onuma, M., Haga, A., Nakaya, Y. and Nagamine, T. 2019. Predation on endangered species by cats in the northern forests of Okinawa-jima Island, Japan. *Mammal Study*, 45, 63–70.
- 小林 峻・金城道男・仲地 学・伊澤雅子・中谷裕美子・長嶺 隆. 2022. 南大東島における外来種ニホンイタチ(哺乳綱: 食肉目: イタチ科)の分布と食性. 沖縄生物学会誌, 60, 43–52.

- 小林照幸. 1992. 毒蛇. TBS ブリタニカ, 東京.
- 小溝克己・小溝隼人. 2012. 鹿児島県三島村黒島の両生爬虫類. 九州両生爬虫類研究会誌, 3, 9–12.
- 小柳和助・山田栄司・江原秀典・松山資郎・上遠野次男. 1969. 鳥獣保護制度. 林野庁(編), 鳥獣行政のあゆみ, 林野弘済会, 東京, pp. 119–258.
- 久貝勝盛. 2013. 宮古諸島における聞き取り調査. 沖縄県教育委員会(編), 沖縄県天然記念物調査シリーズ第 46 集: キシノウエトカゲ生息実態調査報告書. 沖縄県教育委員会, 那覇, pp. 154–164.
- Kurita, K. and Hikida, T. 2014. Divergence and long-distance overseas dispersals of island populations of the Ryukyu five-lined skink, *Plestiodon marginatus* (Scincidae: Squamata), in the Ryukyu Archipelago, Japan, as revealed by mitochondrial DNA phylogeography. *Zoological Science*, 31, 187–194.
- Maeda, T., Nakashita, R., Shionosaki, K., Yamada, F. and Watari, Y. 2019. Predation on endangered species by human-subsidized domestic cats on Tokunoshima Island. *Scientific Reports*, 9, 16200.
- 前之園唯史・戸田 守. 2007. 琉球列島における両生類および陸生爬虫類の分布. *Akamata*, 18, 28–46.
- Masuda, R. and Watanabe, S. 2015. *Mustela itatsi* Temminck, 1844. In Ohdachi, S. D., Ishibashi, Y., Iwasa, M. A., Fukui, D. and Saitoh, T. (eds.), *The Wild Mammals of Japan Second Edition*. Shoukadoh, Kyoto.
- 松村 猛. 1971. 沖縄における野その被害と対策. 植物防疫, 25, 461–463.
- 御厨正治. 1965. 野鼠天敵としてのイタチの有効性について. 山脈, 16(8), 18–19.
- 御厨正治. 1966. 沖永良部島のイタチ. 哺乳動物学雑誌, 3(2), 39.
- 御厨正治. 1969. いたち—有益獣増殖所設立 10 周年記念. 農林省宇都宮営林署, 宇都宮.
- 南大東村誌編纂委員会. 1990. 南大東村誌(改訂). 南大東村, 南大東.
- 蓑田正美. 1956. 三島村黒島のそ族棲息状況. 環境衛生, 3(3), 22–27.
- 三友国五郎. 1954. トカラ列島誌. 埼玉大学紀要(人文・社会科学編), 3(別冊), 156–179.
- 宮城邦治. 1982. 波照間島の植生概観と動物相. 沖縄国際大学南島文化研究所(編), 波照間島調査報告書. 沖縄国際大学南島文化研究所, 宜野湾, pp. 105–123.
- 宮城邦治. 1983. 伊良部島の植生概観と動物相. 沖縄国際大学南島文化研究所(編), 伊良部島調査報告書. 沖縄国際大学南島文化研究所, 宜野湾, pp. 113–119.
- 宮城邦治・三井興治. 1981. 慶留間島の陸上脊椎動物相. 沖縄生物学会誌, 19, 53–56.
- 宮城邦治・嵩原建二. 1992. 北大東島の鳥類と哺乳類. 沖縄県教育委員会(編), ダイトウオオコウモリ保護対策緊急調査報告書, 沖縄県天然記念物調査シリーズ第 31 集. 沖縄県教育委員会, 那覇, pp. 53–62.
- 宮城邦治・当山昌直. 1988. やんばるの森の動物たち. 池原貞雄・加藤祐三(編), ニライ・カナイの島々—沖縄の自然はいま. 築地書館, 東京, pp. 114–126.
- 宮古地方庁. 1970. 宮古の概要. 琉球政府, 那覇.
- 宮本常一・山本周五郎・楫西光速・山代 巴(編). 1960. 日本残酷物語第二部—忘れられた土地. 平凡社, 東京.
- 宮良安正. 1972. 野鼠駆除対策状況. 琉球政府農林局沖縄植物防疫協会(編), 琉球政府植物防疫行政のあゆみ. 琉球政府農林局沖縄植物防疫協会, 那覇, pp. 294–299.
- 森田忠義. 1964. 奄美大島の動物. 鹿児島県理科教育協会(編), 鹿児島の自然. 鹿児島県理科教育研究会, 鹿児島, pp. 303–327.
- 森田忠義. 1975. 奄美瀬戸内町の陸域の動物—主に哺乳・鳥・爬虫・両生類について. 南日本文化, 8, 79–86.
- 森田忠義. 1976. 徳之島・伊仙町の陸生育椎動物. 南日本文化, 9, 125–132.
- 森田忠義. 1984. 大隅諸島・屋久島の哺乳類, 爬虫類, 及び両生類相について. 環境庁自然保護局(編), 屋久島原生自然環境保全地域調査報告書. 環境庁自然保護局, 東京, pp. 687–669.
- 森田忠義. 1988a. 黒島の陸生育椎動物相. 鹿児島県高等学校教育研究会 理科部会誌, 29, 12–20.
- 森田忠義. 1988b. 陸の動物. 与論町誌編集委員会(編), 与論町誌. 与論町, 与論, pp. 36–49.
- 森田忠義. 1988c. 野生牛の住む, トカラ列島・口之島の陸生育椎動物相. 鹿児島県高等学校教育研究会 理科部会誌, 30, 14–19.
- 森田忠義. 1992. 口永良部島の爬虫・両生類の分布調査. 自然愛護, 18, 9–12.
- 森田忠義. 1995. 脊椎動物. 十島村誌編集委員会(編), 十島村誌. 十島村, 鹿児島, pp. 147–187.
- 村田 行・阪口法明. 1991. 西表島における移入動物について. 池原貞雄(編), 南西諸島の野生生物に及ぼす移入動物の影響調査. 世界自然保護基金日本委員会, 東京, pp. 99–104.
- 永井龜彦. 1938a. カンザンチクの結實. 鹿児島縣(編), 史蹟名勝天然記念物調査報告第 4 輯. 鹿児島縣, 鹿児島, pp. 61–69.
- 永井龜彦. 1938b. 南西諸島の動物分布. 鹿児島縣(編), 史蹟名勝天然記念物調査報告第 4 輯. 鹿児島縣, 鹿児島, pp. 49–52.
- 仲村 昇・鳥飼久裕・高 美喜男・閔 伸一. 2013. トカラ列島(十島村). 環境省自然保護局 生物多様性センター(編), 平成 24 年度モニタリングサイト 1000 海鳥調査報告書. 環境省自然保護局 生物多様性センター, 富士吉田, pp. 65–80.
- 中村泰之. 2008. 沖永良部島におけるアオカナヘビの生息分布の標本にもとづく初記録. *Akamata*, 19, 20–22.
- 中村泰之. 2016. 与論島の両生類と陸生爬虫類—残された骨が物語るその多様性の背景. 水田 拓(編), 奄美群島の自然史学—亜熱帯島嶼の生物多様性. 東海大学出版会, 平塚, pp. 351–369.
- 中村泰之. 2024. ガラスヒバアの阿嘉島における 2 例目の記録, および同島における在来陸生ヘビ類の記録について. *Akamata*, 33, 57–59.
- Nakamura, Y., Takahashi, A. and Ota, H. 2009. Evidence for the recent disappearance of the Okinawan tree frog *Rhacophorus viridis* on Yoronjima Island of the Ryukyu Archipelago, Japan. *Current Herpetology*, 28, 29–33.
- Nakamura, Y., Takahashi, A. and Ota, H. 2013. Recent cryptic extinction of squamate reptiles on Yoronjima Island of the Ryukyu Archipelago, Japan, inferred from garbage dump remains. *Acta Herpetologica*, 8, 43–58.

- Nakamura, Y., Takahashi, A. and Ota, H. 2014. A new, recently extinct subspecies of the Kuroiwa's Leopard Gecko, *Goniurosaurus kuroiwae* (Squamata: Eublepharidae), from Yoronjima Island of the Ryukyu Archipelago, Japan. *Acta Herpetologica*, 9, 61–73.
- 中園和憲・炭山大輔・三谷奈保. 2020. トカラ列島口之島における外来テン(*Martes melampus*)の分布と在来種の捕食. 環境情報科学術研究論文集, 34, 168–173.
- 小原 巍. 1967. 西表島に移入されたホンドイタチ. 哺乳動物学雑誌, 3(5), 127–128.
- Okawara, Y., Sekiguchi, T., Ikeda, A., Miura, S., Sasaki, H., Fujii, T. and Kaneko, Y. 2014. Food habits of the urban Japanese weasels *Mustela itatsi* revealed by faecal DNA analysis. *Mammal Study*, 39, 155–161.
- 沖縄県. 2017. 平成 28 年度外来種対策事業報告書. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.
- 沖縄県. 2018a. 沖縄県対策外来種リスト. 沖縄県.
<https://www.pref.okinawa.jp/kurashikankyo/kankyo/1004621/1004634.html> (参照 2025-09-26)
- 沖縄県. 2018b. 平成 29 年度外来種対策事業(イタチ対策)報告書(概要版). 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.
- 沖縄県. 2018c. 平成 29 年度外来種対策事業報告書. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.
- 沖縄県. 2020. 沖縄県外来種対策行動計画に基づく二ホンイタチ防除計画. 沖縄県環境部, 那覇.
https://www.pref.okinawa.jp/_res/projects/default_project/_page_01/004/820/05-02nihonnitati.pdf (参照 2025-09-26)
- 沖縄県. 2022. 令和 3 年度外来種対策事業(哺乳類対策)報告書(概要版). 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.
- 奥土晴夫. 2012. 波照間島の自然. 新星出版, 那覇.
- 大野隼夫・高槻義隆. 1991. 奄美大島における移入動物の概況—中間報告. 池原貞雄(編), 南西諸島の野生生物に及ぼす移入動物の影響調査. 世界自然保護基金日本委員会, 東京, pp. 7–12.
- 大沢夕志・大沢啓子. 1997. 南大東島自然ガイドブック オオコウモリと水辺の島を歩く. ボーダーインク, 那覇.
- 太田英利. 1981. 波照間島の爬虫両生類相. 爬虫両棲類学雑誌, 9(2), 54–60.
- 太田英利. 1996. 吐噶喇列島における爬虫・両生類の分散, 分化と保全. 中村和郎・氏家 宏・池原貞雄・田川日出夫・堀 信行(編), 日本の自然 地域編 8 南の島々. 岩波書店, 東京, pp. 161–163.
- 太田英利. 2002. 琉球列島の爬虫・両生類と外来種一人間活動に伴う島嶼性の喪失がもたらしたもの. 日本生態学会(編), 外来種ハンドブック. 地人書館, 東京, pp. 245–247.
- 太田英利・増永 元. 2004. 慶良間列島の爬虫・両生類相. みどりいし, 15, 29–35.
- 太田英利・中村泰之・高橋亮雄. 2015. 南西諸島の爬虫・両生類に見られる多様性・固有性とその保全—近年の研究成果からの警鐘. 日本生態学会(編), 南西諸島の生物多様性, その成立と保全. 南方新社, 鹿児島, pp. 18–27.
- Ota, H., Toyama, M., Chigira, Y., and Hikida, T. 1994. Systematics, biogeography and conservation of the herpetofauna of the Tokara Group, Ryukyu Archipelago: New data and review of recent publications. *WWF Japan Science Report*, 2(2), 163–177.
- 大津正英. 1971. イタチの冬期の食性とその保護. 日本応用動物昆虫学会誌, 15, 87–88.
- 琉球大学農家政学部. 1966. 座間味村におけるイタチ事情. 琉大農家便り, 122, 8.
- 斎藤 育・辻 ひろみ・金丸光代. 1980. 平島における relict-crop. 斎藤 育・塚田公彦・山内秀夫(編), トカラ列島—その自然と文化. 古今書院, 東京, pp. 192–199.
- 坂上 舞・濱尾章二・森 貴久. 2011. 喜界島における鳥の巣の捕食: 営巣環境による捕食率の違いと捕食者の特定. 日本鳥学会誌, 60, 88–95.
- 鯨島正道. 1983. 沖永良部島の動物. 南日本文化, 16, 115–135.
- 鯨島正道. 1985a. 奄美大島の動物. 南日本文化, 18, 89–120.
- 鯨島正道. 1985b. 徳之島の動物. 南日本文化, 17, 115–143.
- 鯨島正道. 1989. 加計呂麻島・与路島の動物. 南日本文化, 21, 83–93.
- 鯨島正道. 1991a. 沖永良部島の動物(II)脊椎動物, 昆虫類および陸産貝類. 南日本文化, 23, 101–114.
- 鯨島正道. 1991b. 与論島の動物. 南日本文化, 24, 71–84.
- 鯨島正道. 1995. 喜界島の動物. 南日本文化, 28, 83–95.
- 笹井隆秀・大嶋大地. 2010. 座間味島におけるオキナワトカゲの再発見. Akamata, 21, 33–35.
- 佐藤文保. 2005. 久米島に侵入した自然界のエイリアン(移入種)の記録. 久米島自然文化センター紀要, 5, 27–35.
- 佐藤文保・佐藤直美・岩浅有記・皆藤琢磨・太田英利. 2018. キクザトサワヘビ(有鱗目:ナミヘビ科)の保全に向けて. 爬虫両棲類学会報, 2018, 197–203.
- 澤田 明・大林恭子・安里 瞳. 2023. 波照間島におけるキシノウエトカゲの近年の記録. Akamata, 32, 42–47.
- 関口恵史・小倉 剛・佐々木健志・永山泰彦・津波滉遵・川島由次. 2002. 座間味島における二ホンイタチ(*Mustela itatsi*)の夏季および秋季の食性と在来種への影響. 哺乳類科学, 42, 153–160.
- 関 伸一. 2001a. 南西諸島北部に移入されたイタチ(上)とイタチによるアカヒゲの卵の捕食痕(下). 森林防疫, 50, 227.
- 関 伸一. 2001b. 南西諸島北部における希少鳥類の生息状況—トカラ列島中之島の事例. 森林防疫, 50, 228–232.
- 関 伸一. 2012a. アカヒゲ. Bird Research News, 9(1), 4–5.
- 関 伸一. 2012b. 自動撮影カメラとタイマー付録音機で記録されたトカラ列島の無人島群における鳥類相. Bird Research, 8, A35–A48.
- 瀬戸内町史編纂委員会. 1999. 瀬戸内町誌歴史編資料集 1 [新聞資料集]. 瀬戸内町, 瀬戸内, 568 p.
- 柴田保彦. 1964. 沖永良部島(奄美群島)の両生は虫類. 関西自然文化研究会研究報告, 1, 13–16.
- 島村賢正. 2013. 八重山諸島における聞き取り調査. 沖縄県教育委員会(編), 沖縄県天然記念物調査シリーズ第 46 集. キシノウエトカゲ生息実態調査報告書. 沖縄県教育委員会, 那覇, pp. 165–194.
- 清水優子. 2013. 宮古島市におけるサトウキビの野そ被害の推移と広域防除の効果. 沖縄農業, 46(1), 21–28.
- 下野敏見. 1994. トカラ列島民俗誌. 第一書房, 東京.
- 塩野崎和美. 2016. 好物は希少哺乳類—奄美大島のノネコのお話. 水田 拓(編), 奄美群島の自然史学—亞熱帯島嶼の生物多様性.

- 東海大学出版部, 平塚, pp. 271–289.
- 白石 哲. 1982. イタチによるネズミ駆除とその後. 採集と飼育, 44, 414–419.
- 城間恒宏. 2016. ニホンイタチによるダイトウヒメハルゼミの捕食事例. 沖縄生物学会誌, 54, 47–49.
- 城間恒宏. 2019. 哺乳類. 宮古島市史編さん委員会(編), 宮古島市史第三巻自然編 第一部(本編)みやこの自然. 宮古島市教育委員会, 宮古島, pp. 467–477.
- 諸喜田茂充. 1984. 帰化動物. 日本生物教育会沖縄大会「沖縄の生物」編集委員会(編), 全国大会記念誌「沖縄の生物」. 沖縄生物教育研究会, 那覇, pp. 377–384.
- 鈴木 聰. 2018. ニホンイタチ—在来種と国内外来種. 増田隆一(編), 日本の食肉類一生態系の頂点に立つ哺乳類. 東京大学出版会, 東京, pp. 135–153.
- 高木昌興・樋口広芳. 1992. 伊豆諸島三宅島におけるアカコッコ *Turdus celaenops* の環境選好とイタチ放獣の影響. *Strix*, 11, 47–57.
- Takagi, M., Akatani, K., Matsui, S. and Saito, A. 2007. Status of the Daito Scops Owl on Minami-Daito Island, Japan. *Journal of Raptor Research*, 41, 52–56.
- 高橋亮雄・長谷川善和・片桐千亜紀. 2023. 化石ヤマネコ—イリオモテヤマネコの古生物学. 土肥昭夫・伊澤雅子(編), イリオモテヤマネコ—水の島に生きる. 東京大学出版会, 東京, pp. 322–348.
- 高良鉄夫. 1973. ハブ=反鼻蛇—恐るべき毒ヘビの全貌. 琉球文教図書, 那覇.
- 嵩原建二. 1993. 波照間島の鳥類と哺乳類. 沖縄県立博物館紀要, 19, 1–16.
- 嵩原建二・池間幸男・兼城克男. 1995. 慶良間諸島の鳥類. 沖縄県立博物館紀要, 21, 101–128.
- 嵩原建二・島村 修・加治木真市. 1998. 波照間島で記録された鳥類とその方言名について. 沖縄県立博物館(編), 波照間島総合調査報告書. 沖縄県立博物館, 那覇, pp. 65–86.
- 嵩原建二・当山昌直・小浜継雄・幸地良仁・知念盛俊・比嘉ヨシ子. 1997. 沖縄の帰化動物—海をこえてきた動物たち. 沖縄出版, 浦添.
- 竹中 践. 2006. 沖永良部島のアオカナヘビについて. 爬虫両棲類学会報, 2006, 24–26.
- 竹中 践. 2014. 沖永良部島, 徳之島のアオカナヘビ. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物 3 爬虫類・両生類. ぎょうせい, 東京, pp. 91–92.
- 竹富町. 1969. 町勢要覧. 竹富町, 竹富.
- 田中 聰. 2004. 小浜島における両生爬虫類の現状について. 沖縄県立博物館(編), 小浜島総合調査報告書. 沖縄県立博物館, 那覇, pp. 21–33.
- 谷川 雁. 1959. 工作者宣言. 中央公論社, 東京.
- 多良間村誌編纂委員会. 1973. 村誌たらま島. 多良間村, 多良間.
- 戸田 守・笹井隆秀・木寺法子・城間恒宏・藤本治彦・岡村麻生. 2013. 宮古・八重山諸島におけるキシノウエトカゲの生息状況調査. 沖縄県教育委員会(編), 沖縄県天然記念物調査シリーズ第46集. キシノウエトカゲ生息実態調査報告書. 沖縄県教育委員会, 那覇, pp. 11–53.
- 戸田 守・高橋洋生. 2018. ミヤコカナヘビの保全—現状と今後の展望—. 爬虫両棲類学会報, 2018, 187–193.
- 徳田御穂. 1954. 鼠の生態に関する諸問題. 三坂和英(編), 野鼠とその防除. 日本学術振興会, 東京, pp. 41–63.
- 当山昌直. 1981a. 渡名喜島の陸上脊椎動物. 沖縄県立博物館(編), 県立博物館総合調査報告書 II—渡名喜島. 沖縄県立博物館, 那覇, pp. 49–56.
- 当山昌直. 1981b. 宮古群島の両生爬虫類. 沖縄生物教育研究会誌, 14, 30–39.
- 当山昌直. 1983. 沖縄群島の両生爬虫類相(II). 座間味村の両生爬虫類. 沖縄県立博物館(編), 県立博物館総合調査報告書 III—一座間味村. 沖縄県立博物館, 那覇, pp. 16–22.
- 当山昌直. 1990a. 両生類・爬虫類. いらぶの自然編集委員会(編), いらぶの自然 動物編. 伊良部町, 伊良部, pp. 108–121.
- 当山昌直. 1990b. 哺乳類. いらぶの自然編集委員会(編), いらぶの自然 動物編. 伊良部町, 伊良部, pp. 202–206.
- 当山昌直. 2010. 両生爬虫類野外調査記録—1973 年奄美大島・喜界島. Akamata, 21, 50–55.
- 当山昌直・久貝勝盛・島村賢正. 2013. 宮古・八重山における聞き取り予備調査. 沖縄県教育委員会(編), 沖縄県天然記念物調査シリーズ第 46 集. キシノウエトカゲ生息実態調査報告書. 沖縄県教育委員会, 那覇, pp. 149–153.
- 豊島林三. 1994. 喜界島に於けるイタチ導入について. 榎樹(がじゅまる), 10, 95–97.
- Uchida, T. 1968. Observations on the efficiency of the Japanese weasel, *Mustela sibirica itatsi* Temminck & Schlegel, as a rat-control agent in the Ryukyus. *Bulletin of the World Health Organization*, 39, 980–986.
- 内田照章. 1969. 太平洋諸島における防鼠対策への国際協力—とくに天敵動物の利用とその効果について. 環境衛生, 16(1), 30–38.
- Uchida, T. 1969. Rat-control procedures on the Pacific islands, with special reference to the efficiency of biological control agents. II. Efficiency of the Japanese weasel, *Mustela sibirica itatsi* Temminck & Schlegel, as a rat control agent in the Ryukyus. *Journal of the Faculty of Agriculture, Kyushu University*, 15, 355–385.
- 内田照章・宮良安正. 1972. 沖縄における野鼠被害と天敵防除. 森林防疫, 21, 228–231.
- 亘 悠哉. 2016. 外来哺乳類の脅威—強いインパクトはなぜ生じるか? 水田 拓(編), 奄美群島の自然史学—亜熱帯島嶼の生物多様性. 東海大学出版部, 平塚, pp. 313–331.
- 亘 悠哉・鳥飼久裕・川口秀美・木元侑菜. 2021. イエネコによる奄美大島固有種アマミトゲネズミの捕殺事例. 沖縄生物学会誌, 59, 19–23.
- Wodzicki, K. 1973. Prospects for biological control of rodent populations. *Bulletin of the World Health Organization*, 48, 461–467.
- 八重山地方庁. 1972. 八重山要覧. 琉球政府, 那覇.
- 山田文雄. 1998. わが国における移入哺乳類の現状と課題. 哺乳類科学, 38, 97–105.
- 山田文雄. 2000. 移入マンガースと奄美大島の生態系. 遺伝, 54(5), 55–60.

- 山田文雄. 2021. 九州大学農学部動物学教室におけるネズミ被害対策研究の取り組みの歴史. 哺乳類科学, 61, 55–68.
- 山本拓海・安里 瞳・宮里俊輔・笹井隆秀. 2023. 慶良間諸島における外来種ニホンイノシシによるウミガメ卵の食害. 沖縄生物学会誌, 61, 33–41.
- 山城安市. 1989a. 農業・畜産. 座間味村史編集委員会(編), 座間味村史 上巻, 座間味村, 座間味, pp. 575–627.
- 山城安市. 1989b. 戦後のあゆみ. 座間味村史編集委員会(編), 座間味村史 上巻. 座間味村, 座間味, pp. 403–433.
- 安間繁樹. 2001. 琉球列島—生物の多様性と列島のおいたち. 東海大学出版会, 東京.
- 米田政明. 2008. イタチ. 自然環境研究センター(編), 日本の哺乳類改訂第2版. 東海大学出版会, 秦野, p. 82.
- 四元虎則. 1959. 奄美大島に於けるイタチの放獣. 鳥獣集報, 17, 156–158.
- 湯川 仁. 1968. 広島県比和町におけるホンドイタチの食性. 比和科学博物館研究報告, 12, 7–10.

Abstract

The history and present status of the Japanese weasel *Mustela itatsi* introduced to the Nansei Islands, as well as its potential impacts on the local terrestrial faunas, are reviewed. The weasel introductions in this region were carried out on 39 or 40 islands from the late 1930s (Tokara Islands) to 1977 (Akajima of the Okinawa Islands). In many cases, the purpose was to control rodents, which are agricultural pests. It was also used to control the venomous viper (Habu), which harms humans. Weasel populations still exist on 21 islands (Kuroshima of the Kamimishima Islands, Gajajima and other four islands in the Tokara Islands, Kikajima and other two islands in the Amami Islands, Zamamijima and other three islands in the Okinawa Islands, Miyakojima and other four islands in the Miyako Islands, Haterumajima of the Yaeyama Islands, and Kita-Daitojima and Minami-Daitojima of the Daito Islands), with some information on the past existence of established populations in two additional islands. Evidence suggests that these introduced weasels have caused population declines, localization, or extinction of indigenous terrestrial animals on these islands through predation.

Key words: Alien species, Conservation, Introduction, Predator.